三年生の美しい話心をうつ話

三年生の学級文庫

監修　東京大学名誉教授 海後宗臣・評論家 中野好夫・児童文学者 浜田廣介

文・松井英子　絵・伊藤悌夫

三年生の学級文庫⑫

三年生の美しい話心をうつ話

監修
日本教育学会会長・東京大学名誉教授
海後宗臣
評論家
中野好夫
児童文学者
浜田廣介

集英社

ルン谷のおくにそびえる、マカルーのながめ。(隊いん白籏史朗・撮影)

マカルーの日しょうき　ベースキャンプ4700メートルから見た、バ

おかあさん死なないで　うすぐらくなったものおき小屋の中で、ヘンリーは夢中になって、時計をいじっていました。　(41ページ)

*みなさんへ

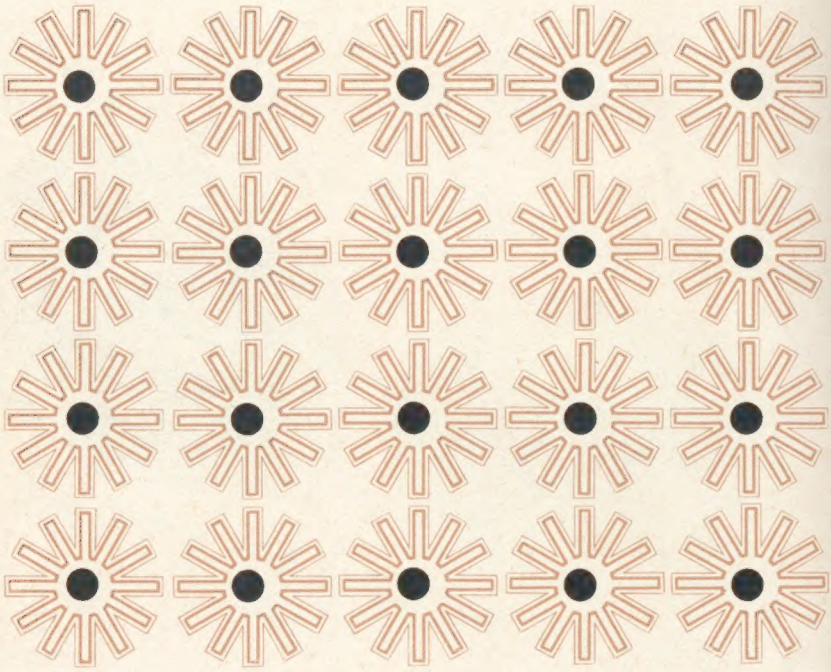
ひとつのことに、一生けんめい、うちこむようす。人にやさしく、しんせつにする心。

そんな話をきくと、じぶんの気もちまで、あたたかく、たかめられるのを、おぼえます。

ここには、十四ぺんのそんな話を、あつめました。きっと、みなさんの心に、のこることとおもいます。

さあ、たのしんで、およみください。

松井　英子



もくじ

《日本の心・女子きょういくにつくした津田梅子》
日本のお人ぎょう ……10
《勇気のものがたり・はじめて種痘をおこなったジェンナー》
むす子のうでにほうそうを ……19
《人のくろうをしる・よい政治をした水戸の黄門さま》
はたらく人をだいじに ……30
《かなしみにまけない・自動車をはつめいしたフォード》
おかあさん死なないで ……39
《努力のたまもの・赤えの有田やきをつくりだした柿えもん》
きちがいきざえもん ……53
《きそくをまもる・オランダのユリアナ女王》
女王への電話 ……65
《友じょうの登山隊・日本とフランス登山隊の話》
マカルーの日しょうき ……75

〈心のおくりもの・ロシア(ソ連)の大作家トルストイ〉
レオがあげたのは……103
〈人びとのくらしをゆたかに・土佐のかろう野中けんざん〉
三つのみやげ……117
〈やさしい心・はいくのめい人小林一茶〉
すずめもはえも友だちだい……130
〈ものごとにうちこむ心・たのしいまんがえいがをつくったディズニー〉
ねずみをまんがに……141
〈きょうだい愛のひかり・えかきで学者の渡辺華山〉
雪げしきのえ……150
〈人るい愛にもえて・黒人の父シュバイツァー博士〉
ジャングルにひびくかね……160
〈心がわかる音がく・ことのめい人宮城道雄〉
心でひくことの音……172
解説・読後の子どもの質問や話しあいを大切に……184
学習院初等科教諭　土田　治男

＊刊行のことば＊

小学三年生の児童たちに、読書のよろこびと、しゅうかんとをやしない、ただしい国語を身につけ、かんがえかた、かんがえる力をそだてて、人間形成にやくだつよう企画したのが、この文庫です。

取材、文章の表現、くち絵さし絵などにさい心のちゅういをはらい、たのしみながら、読むことができるようにいたしました。

装丁・鈴木安男
写真・白籏史朗

三年生の学級文庫 ⑫

三年生の美しい話心をうつ話

日本の心

日本のお人ぎょう

——女子きょういくにつくした津田梅子——

小さいりゅう学生

一八七一年（明治四年）四月、横浜（神奈川県）のはとばは、みおくりの人たちで、ごったがえしていました。

いわくらともみ、きどこういん、おおくぼとしみち、などという、政府のえらいやく人が、アメリカやヨーロッパしさつの、りょこうにでかける日でした。

しかし、みおくりの人たちは、えらいやく人たちよりも、もうひとむれの、小さい女の子たちのほうへ、熱心に手をふ

っています。
「体を、だいじにね。」
「しっかり、べんきょうしてらっしゃいよう。」
「がんばって、くるんだぞう。」
そして、みんな目がしらを、あつくしています。
「あれが、日本からはじめて外国へいく、女のりゅう学生たちだよ。」
「五人とも、まだ小さいんだねえ。」
「あのお人ぎょうみたいに、一ばん小さい子も、たったひとりでいくのかい。」
「そうだよ。あれが津田梅子って子だよ。」
津田梅子は、このときまだやっと七才でした。

おかあさんにゆってもらった、ちごまげというかみに、赤いたもとのきものをきて、しきりに手をふっています。

「かわいそうに。あんな小さな子を、たったひとりで、外国へやる、おやもひどいね。」

「いや、しっかりした子なんですよ。こ

ん度のりゅう学生の話をきくと、じぶんからすすんで、いきたいとたのんだそうですよ。」

はとばのかたすみでは、梅子のおかあさんが、またたきもせず、小さいむすめのすがたを、みつめています。

「梅子、しっかりやるんですよ。うちへかえりたくなったら、にもつの中の、いちまつ人ぎょうをみるんですよ。おかあさんはいつでも、梅子をみまもっていますからね。」

梅子は、アメリカへつくと、ワシントン市のランメンさんというちへ、ひきとられました。そして、スチーブンソン・セミナリーという小学校へ、かよいだしました。

しらない人たちばかり、その上ことばもわからない国で、梅子のべんきょうが、はじまったのです。

ひるまは、夢中でべんきょうして いても、夜ねるころになると、梅子のむねには、おかあさんのかおが、いっぱいになります。

梅子は、人ぎょうをそっとと りだして、みつめるのです。

（おかあさん、
梅子はさみしくない
のよ。ほら、こんなに元
気で、べんきょうしています。）
その目は、なみだがあふれそうに、
いっぱいです。
いちまつ人ぎょうは、まっ黒なふさふさしたおかっ
ぱを、かたまでたらしています。ぱちっとひらいた目。ながい
ふりそで。むなだかにしめたおび。横浜から、船にのった日の、梅子のように、
りりしくすずしい目をして、梅子をみかえしているのです。
（これは、日本の人ぎょうなのだ。アメリカでどんなにべんきょうしても、えいごがじょ
うずになっても、日本人の心をわすれては、いけないのだ。おかあさんは、そのつもりで、
この人ぎょうをいれてくださったのだ。）

梅子は、しっかりと人ぎょうをだきしめて、ほおずりします。

（わたしは、日本の女の子だ。しっかりべんきょうして、一日もはやく日本へかえり、やくにたつ人間にならなければ。）

梅子のたからもの

梅子は、十一年ぶりに日本へかえってきました。アメリカ人の中ばかりで、くらした梅子は、日本のことばを、ほとんどわすれていました。なにをいわれても、にこにこしているばかりです。

そんな梅子を、

「梅子さんは、すっか

りアメリカ人におなりだね。」
と、いやみをいう人もいます。
しかし、このときも梅子は、おかあさんがくれた、いちまつ人ぎょうを、だいじにもってかえっていました。
梅子が、まいばんのようにだきしめ、ほおずりした人ぎょうは、きものも色があせています。ほおもよごれています。でも、その目はすこしもかわらず、りりしくすんでいます。
（わたしは、日本の人ぎょうです。あなたも日本の女の子です。）
そう、かたりかけているようでした。
日本にはじめて女だけの、えいごの学校をつくったときも、梅子は、生徒たちにいいました。

「みなさんは、いくらえいごのべんきょうをしても、日本の心をわすれてはなりません。りっぱな人間であることが、だい一です。」

梅子の部屋には、いつも古ぼけたいちまつ人ぎょうが、かざってありました。

「これは、わたしのたからものよ。」

梅子はそういって、一生その人ぎょうをだいじにしました。

（おわり）

梅子は、かぞく女学校や、女子しはん学校のえいごの先生になりましたが、梅子のえいごは、おしえかたがうまいとひょうばんでした。一九〇〇年には、いまの津田じゅく大学のもとになる学校をつくりました。アメリカへも二度いき、そのよいところをどんどんとりいれて、一生、日本の女の人のべんきょうのために、力をつくしました。一九二九年、六十五才で死にました。

勇気のものがたり

むす子のうでにほうそうを

——はじめて種痘をおこなったジェンナー——

牛のほうそう

ジェンナーのところへ、ひとりの百しようの女の人が、しんさつをうけにきました。

「ジェンナー先生。どうも気分がわるくて——。熱があって、体がだるいのです。」

「どれどれ。」

ジェンナーは、ていねいにしんさつしました。

「なるほど、熱がたかい。かぜだとはおもうが、気をつけないといけません。い

ま、あちこちで、ほうそうがはやっているからね。ほうそうだったら、たいへんだ。」

すると、百しょうの女の人は、わらいながら、

「先生、ほうそうだったら、心配ねえですよ。わしは、ほうそうにはならねえから。」

ジェンナーは、びっくりしました。

そのころ、いまから二百年ぐらいまえには、ほうそうは、みんなから、とてもこわがられている病気でした。ほうそうのために、たくさんの人が死にました。うんよくいのちがたすかっても、あばただらけの、みにくいかおになります。ほうそうの病気がでた家には、だれも、ちかづかないし、死んでも、そうしきにいくのも、いやがりました。

ほうそうは、うつる病気だったのです。

「ほうそうにはかからないって、それはまた、なぜだね？」

ジェンナーは、おもわず熱心にききました。

「わしの家では、牛をかってますだよ。牛がほうそうにかかってね、わしは、それがうつっちまったんですよ。」

「それは、たいへんだ。」

「なんの。」
女の人は、またわらいます。
「牛のほうそうは、かるいですだ。わしは、手のゆびのところに、小ちゃい水ぶくれが、ふたつ三つできただけですだに。すぐなおっちまう。そんでもう、ほうそうには、

二度とかからねえですよ。」
「ほんとうかね。どうしてそんなことが、いえるんだね。」
「牛のほうそうにかかったもんは、だれでもそうだね。うそだとおもうなら、先生じぶんできいてみればいいだよ。」
女の人がかえったあと、ジェンナーは、すっかりかんがえこみました。
そして、牛をかっているうちを、なんげんもたずねました。
「あんたのところの牛は、ほうそうにかかったかね。うちの人に、そのほうそうはうつったかね。そして人間のほうそうには、かからなかったかね。」
「そのとおりですだよ。ジェンナー先生。」
どの家でもいいました。
ふしぎだ、なぜだろう。
もし、牛のほうそうにかかることで、ほんとのほうそうにかからないですむのなら、こ

んなしあわせなことはない。たくさんの人が、たすけられる。

ジェンナーは、じぶんで色いろべんきょうしました。それだけではたりなくて、ロンドンへいき、ジョン・ハンターというえらい博士について、おしえをうけました。

博士は、熱心にジェンナーの話をききました。じぶんでも本をしらべたり、けんきゅうしたりしました。そして、ジェンナーにいいました。

「そういうことは、あるかもしれ

ない。めんえきといって、その病菌のかるいものを、人間にうえつけると、体にその病気にたいする、ていこう力ができるのです。そのために、こん度つよい病菌がはいってきたとき、それにまけない力ができている。ほうそうも、そうかもしれない。だがそれは人間でためしてみなければ、はっきりいえないことです。」

ハンター博士は、じっとジェンナーの目をみながら、いいました。

むす子のうでに

ジェンナーは、バークレイ村にかえってきました。かんじゃをみながら、ほうそうのけ

んきゅうをつづけました。

「それをたしかめるのは、人間でためしてみるよりほかない。」

そういったハンター博士のことばが、いつも、むねにありました。

まずけんこうな人に、牛のほうそうをうえる。その上で、ほうそうの病人のうみを、うつして、しけんするのです。ほんもののほうそうがうつって、死ぬかもしれません。

いくら、りくつの上でいいとおもっても、ほんとに、そのとおりにいくかどうかは、わかりません。

ジェンナーのけっ心がつかないうちに、ある年、ほうそうが大りゅうこうしました。おとなたちばかりでなく、小さい子どもまでが、たかい熱にくるしみ、もがきながら死んでいきます。なん人もの人が、ジェンナーの手あてのかいもなく死にました。

ジェンナーは、もうそのまま、みていることができなくなりました。

そのころ、ジェンナーは、けっこんしてかわいい男の子が、生まれていました。

（よし、わたしは、あの子に牛のほうそうをうえてみよう。その上で、ほうそうの病人の

うみをうつすのだ。もし発病しなければ、世界中の人がたすかる。）

つまのキャスリーンは、ジェンナーのけっ心をきくと、おどろきで、しばらく声もでないようでした。

「あなた、それはどうしても、やらなければならないのでしょうか。」

「そうだよ、キャスリーン。わたしはやりたいのだ。」

キャスリーンは、大きな目でジェンナーをみつめています。

やがて、しずかな声でいいました。

「ジェンナー、わたしはあなたをしんじています。」

丸まるとふとった、一才六か月の男の子は、よろこんで、ジェンナーのうでにだかれました。

「おりこうだね、ぼうや。」

ジェンナーは、そのうでに、牛のほうそうのうみじるをうえたのです。

一七九六年五月十四日のことでした。

やがてそのばしょは、赤く小さくはれあがり、水ぶくれができました。しかし一週間もしないうちに、かわいてきれいになおってしまいました。百しょうの女の人が、いったとおりです。

二か月たちました。

こん度は、いよいよほうそうの病人のうみをうつすのです。さすがに、ジェンナーの気もちは波立ちました。たったひとりのむす子は、そのために死ぬかもしれません。

（神さま、力をおかしください。たくさんの

人のために、この子をおまもりください。）

心をしずめて、いのりました。

ジェンナーのメスは、むす子のうでに、ほうそうのうみを、うつしていきます。

キャスリーンも青ざめながら、じっとジェンナーの手もとをみつめています。

一日が、一年にも、十年にもかんじられる日がつづきます。むす子には、なんのかわったところも、あらわれません。それどころか、まい日元気であそびまわっています。

ぶじに十日がすぎました。キャスリーンは、むす子をだきしめて、なきました。ジェンナーも、そのつまの手を、かたくにぎりしめました。

「ありがとう、キャスリーン。きみのたすけがあったからだ。」

その種痘のおかげで、わたしたちは、おそろしいほうそうから、すくわれることになったのです。

（おわり）

※　ジェンナーは、イギリスのバークレイの生まれです。じぶんのむす子に種痘をしたあと、二十三人の人でもためし、そのきき目をろんぶんにかいて、いくつもはっぴょうしました。でもなかなかみとめてくれません。そのかずが六千人になったとき、やっと国がみとめてくれました。日本に種痘がはいってきたのは、一八四九年です。

人のくろうをしる

はたらく人を だいじに

——よい政治をした水戸の黄門さま——

川かぜの中で

「光圀のとのさまのものずきにも、こまったものじゃのう。」

「まったくじゃ。なにをかんがえて、こんなさむい日に、お女中やわしらに、紙すきをみにまいろうと、おっしゃるのであろう。」

けらいたちは、ぶつぶつもんくをいいながら、ぎょうれつをつくっていきます。

「は、はくしょい。そうでなくても、かぜをひきそうじゃわい。ブルブル。」

やがて、ごてん女中や、けらいたちをつれた光圀のぎょうれつは、りょうないの川っぷちにつきました。

川ぎしにつくと、そこには屋たいがくんであって、むこうぎしがみわたせるようになっています。むこうぎしは紙すきばです。

「みなのもの、さむいであろうが、きょうは紙すきのしごとを、よくみるがよいぞ。」

と、光圀がいいました。

火おけ（ひばち）のよういもありません。

けらいたちは、かおをみあわせ、またもんくをいいかけました。しかし、とのさまの光圀が、さっさとせきにつくのをみると、それにしたがうよりしかたがありません。屋たいはよしずばりで、屋根がのっているだけです。二月のさすような川かぜは、えんりょなくふきつけてきます。その上小さい雪までふっているのです。

だが、川むこうをみると、けらいたちは、いっぺんにいきをのみました。

そこには、五、六人の女たちが、すそをからげ、うでをまくりあげて、川の中で紙すきのしごとをしています。こうぞという木のせんいのにたものを、川の水でさらしているのです。

川かぜにさらされて、すわっているだけでもさむいのです。雪がまいおりている川の水のつめたさはどんなでしょうか。まくりあげた女の人たちのうでが、つめたさに、まっ赤になっているのがみえます。だが女の人たちは、だれひとりもんくをいうものはいません。つぎからつぎへと、こうぞをさらしていきます。

いつか、けらいたちは、さむさをわすれていました。はたらいている人たちの、しんけんなしごとぶりに、身うごきひとつしません。とのさまの光圀も、目をすえて、女の人たちのしごとぶりをみています。

やがて、せきを立ってかえるとき、光圀は、紙すきの女の人たちに、しずかにあたまを

さげました。

それをみると、けらいたちも、おもわずふかく、あたまをさげました。一まいの紙のたいせつさ。それをつくりだす人たちのくろうに、あたまをさげずにいられなかったのです。

かえり道、ぎょうれつのみんなは、だまってあるいていきます。もんくをいうものはひとりもいません。だれのむねの中にも、紙すきの女の人たちの、あの赤くなったうでが、やきついていました。

麦をふむ心

光圀は、ある日、お百しょうの
きものをきて、村へでかけていきました。
麦ふみをしている、おばあさんのそばへいくと、
「おばあさん、せいがでますのう。どれ、わしもちいっと
手つだって、麦をふんであげようわい。」
おばあさんは、あっけにとられて、
「あんたは、どなたじゃな。ごしんせつなじいさんじゃが、みたことのない人じゃな。」
「いやいや、わしは、ちかくの村の、光えもんというじじいじゃよ。」
「へえ、そんな人が、おったかいの。」
麦をふみだした、光圀をみると、おばあさんは、大きな声をだしました。

「あんた、そんなふみかたがあるかい。これは、わしらのだいじな麦じゃ。もっとていねいにふんでくれ。」

すると、むこうの畑から、おばあさんのむす子も、おこっていいます。

「そうじゃとも。ええかげんなふみかたするんなら、やめてくれ。なんでもええ、ふみつけりゃええというもんではないわ。心をこめてふむからこそ、麦もいうことをきいてくれるんじゃ。おい、じいさん、百しょうをなん

とおもうとる？なまくら百しょうじゃな。」

光圀は、もうしわけなさそうに、

「すまん、すまん。」

とくりかえすばかりです。そしてふたりのふみかたをじっとみて、また麦ふみをはじめました。

「ほにほに、そういうふみかたでええんじゃ。ええじいさんじゃの、しごとがはかどるわい。」

おばあさんも、むす子もよろこんでいます。

光圀も、水ばなをすすりあげながら、うれしそうに、麦をふんでいきます。

そこへ、ふたりのさむらいが、かけてきました。きょろきょろしていましたが、光圀をみつけると、はっと手をつきました。

「とのさま、ここにおいでございましたか。」

「ずい分、おさがしいたしました。さ、もうおかえりください。」

おばあさんとむす子は、びっくりぎょう天しました。

「ああ、わしたちはなんということを……。とのさまとはしらなんだ。」

「しつれいなことばかりいいました。どうぞ、おゆるしください。」

青くなってあやまります。

「なんの、なんの。」

光圀は、くびをふって、

「わしこそ、お百しょうの心を、おしえられましたぞ。麦のただしいふみかたもしらず、もうしわけなかった。もうすこし、ふませてもらいましょうわい。」

またせっせと、麦ふみをつづけました。

「みんなのおかげをうけながら、わしはなんにもしらぬ。おしえられることばかりじゃ。」

光圀はそういって、いつもはたらく人たちを、だいじにしました。

（おわり）

徳川光圀は三百四十年ほどまえの、水戸の二だい目のとのさまです。はたらく人をいたわっておもいやりのある政治をしました。学もんがすきで、中国から学者をよんでべんきようしたり、「大日本史」という歴史の本をつくりあげる、大きいしごともしました。

かなしみにまけない

おかあさん死なないで

——自動車をはつめいしたフォード——

きかいのすきなヘンリー

夕ごはんだというのに、ヘンリーがいません。畑しごとからかえってきたおかあさんは、あちこちさがしまわっています。

「ヘンリー、ヘンリーや、お夕はんですよ。」

どこへいったんだろう。

もうすぐ、おとうさんも畑しごとからかえってくるでしょう。十二才になるヘンリーも、さっきまで麦のとりいれを、

手つだっていたのです。それがと中でみえなくなったのです。

（あっ、そうだわ。）

あのとき、友だちのジョンが、畑のそばをとおりかかったことを、おかあさんはおもいだしました。

ジョンは、くさりのついた時計を、ぶんぶんふりまわしていたのです。

「どうしたんだ？ジョン。すばらしい時計だな。そんなにふりまわすとだめになるぞ。」

「へい気さ。時計はこわれてるんだ。」

「こわれてる？どこがだい？」

ヘンリーの目がいっぺんにかがやきました。

「ぼくに、なおさせてくれないか。」

ヘンリーは、こわれてるきかい、こわれてる時計などをぶんかいして、しらべるのが大すきなのです。

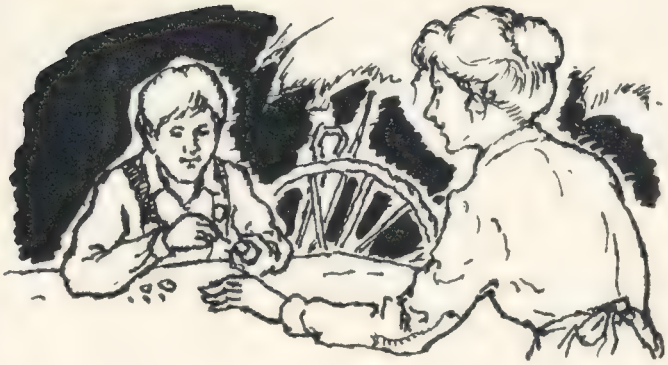
（もしかしたら、あの子は……。）

おかあさんは、いそいで、ものおき小屋へいってみました。

「まあ、ヘンリー、やっぱりここにいたの。」

うすぐらくなったものおき小屋の中で、ヘンリーは夢中になって、時計をいじっています。ぶんかいされたネジや、はぐるまがきちんと、きれの上にならべられています。それ

をいちいち油であらっては、



ヘンリーは、ていねいにくみ立てているのです。

「こんな、くらくなった中で、だめじゃないの。」

ヘンリーはうれしそうに、いきいきした目をあげました。

「うまくいきそうなんだよ、おかあさん。ジョンのやつに、この時計なおして、びっくりさせてやるんだ。」

「おまえは、ほんとにきかいがすきだねえ、ヘンリー。」

おかあさんはそばによると、ヘンリーの手もとをのぞきこみました。そしてためいきをつきました。

「おまえに、ちゃんとしたきかいの、べんきょうをさせてやれたらね。」

そういうおかあさんのかおは、びんぼうなせいかつと、いそがしい畑しごとにやつれています。

「だいじょうぶだよ、おかあさん。」

ヘンリーは、元気よくいいます。

「ぼく、ひとりでだって、きかいのべんきょうするから。あっ、ごめん。」

くびをすくめると、ぺろっとしたをだしました。

「ぼく、ジョンの時計に夢中になって、にわとりにえさをやるのも、やぎを小屋にいれるのも、みんなわすれちゃった。」

おかあさんは、わらいだしながら、

「そんなことだろうとおもって、おかあさんがみんなやっておきましたよ。さ、もうごはんだから。」

ひきかえしかけたおかあさんは、きゅうによろめきました。むねをおさえて、しゃがみこんでしまいました。

「どうしたの！おかあさん。」

びっくりしたヘンリーは、走りよって、おかあさんをささえます。

「かお色がわるいよ。」

「すこしつかれすぎたから。やすめばなおるよ。なんでもないよ。」
「おかあさん、元気だしてね。ぼく、いまにきかいのしゅうり屋になって、おかあさんにきっとらくさせるからね。」
「はいはい、ありがと。たのしみにしていますよ。」
おかあさんは、やつれたほおに、うれしそうなわらいをうかべました。

はやく、はやく！

ある日、ヘンリーが学校からかえってくると、うちの中のようすがへんです。
「おかあさん。ただいまあ。おかあさん。」
おとうさんが、あわてておくからでてきました。
「ヘンリー、おかあさんのようすが、おかしい。はやく町のいしゃをよんできてくれ！」
「えっ、どうしたの？」

きちがいきざえもん　「これは、やきものをやく、まきだいにしてくだされ。」と、とくえもんは、いってくれました。　（56ページ）

レオがあげたのは　レオは、毛皮(けがわ)のついたうわぎをぬぐと、さむそうにしている、まずしいおじいさんに、あげました。(111ページ)

「わからん。くるしがっている。はやくいけ！馬をとばしていくんだ。」
みなまできかず、ヘンリーはそとにとびだしました。
馬屋から馬をひきだすと、夢中でとびのりました。
いくらいそいでも、町のいしゃまでは、時間がかかります。
「はやく、はやく！」
ヘンリーは体をうかせて、馬をうちます。
いしゃの家につくなりとびこみました。
「先生！おかあさんがくるしがっています。大いそぎできてください。」
「それはたいへんだ。」
いしゃもすぐ馬にとびのると、ふたりはものもいわず、馬を走らせます。
はやく、はやく！
ヘンリーは、くるときいじょうに、馬の足がおそい気がします。
おかあさんは、だいじょうぶだろうか。

「ようすは、どんなだったのだね？ヘンリー。」

いしゃがききます。

「それが……、よくわかりません。こないだから、つかれていたんです……。よろよろしたりして……。」

「いかん。むりをしては……。おかあさんは心ぞうの病気があったからな。さあ、いそごう。」

野原をかけました。川をこえました。やっとヘンリーの家がみえてきました。

（おかあさん。すぐだよ。まってて！）

いしゃは、戸口で馬からおりると、家の中へ、かけるようにはいっていきます。

ヘンリーは、ひざまずきました。

（神さま、おかあさんをおまもりください。おかあさんを、おたすけください。）

ながい時間におもわれました。

やがて、いしゃがでてきました。

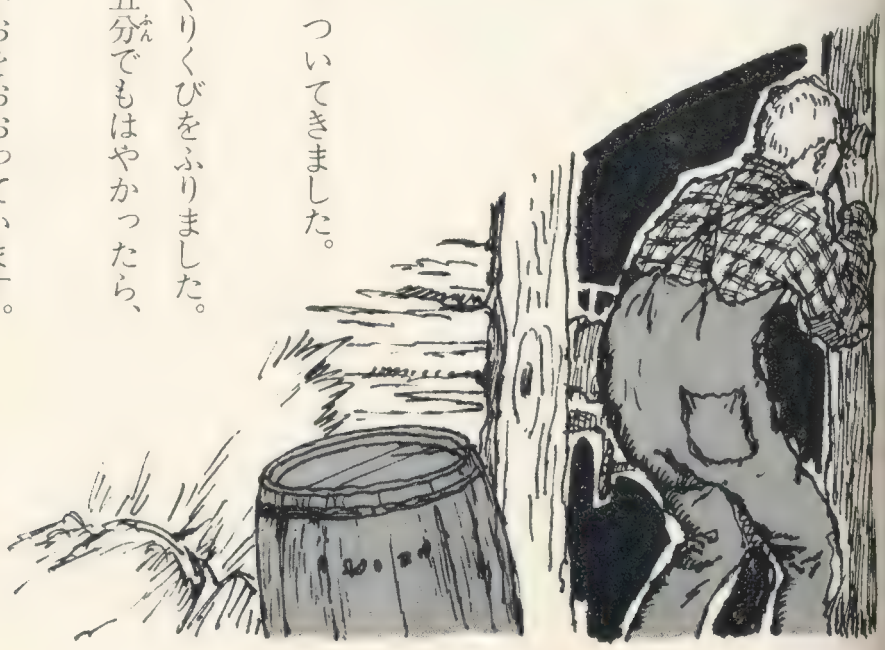
そのあとから、うなだれたおとうさんが、ついてきました。

「先生！」

すがりつくヘンリーへ、いしゃは、ゆっくりくびをふりました。

「ざんねんだった。もう十分……、いや、五分でもはやかったら、なんとかできたかもしれないが……。」

おとうさんは、はしらによりかかって、かおをおおっています。



ヘンリーは、おかあさんのねている部屋へ、はいっていきました。

「おかあさん！」

おかあさんは、ふだんのそまつな服のまま、ベッドにねかされています。

「ヘンリー。」

いまにもえがおでおきあがりそうです。

「ぼく、きかいのしゅうり屋になって、きっとらくをさせるといったのに。」

ヘンリーは、おかあさんの手をにぎりしめました。

はたらきどうしで死んだ、おかあさんの、ざらざらにあれた大き

な手。ヘンリーのほおを、なみだがすべりおちます。

十分、いや五分でもいい、はやかったら……、そういったいしゃのことばが、ヘンリーのむねにつきささってきます。

あんなに一生けんめい、馬をとばしてきたのに……。馬では、もうせいいっぱいのはやさだったのだ。もっとはやく走れるものがあったら……。

『ヘンリー、おまえはほんとにきかいがすきだねえ、おまえにきかいのべんきょうを、させてやれたらねえ。』

おかあさんのことばが、いしゃのことばにかさなって、きこえてきます。

（そうだ。ぼくはきっと、馬よりはやく走るきかいをつくりだしてみせるぞ。うんときかいのべんきょうをして、世界一はやく走るきかいをつくりだしてみせるぞ。おかあさん、きっとみててね。）

ヘンリーは、なきながら、ちかいました。

ヘンリーは、そのけっ心どおり、のちに馬よりはやいきかい、自動車をつくりだしました。

（おわり）

❀ ヘンリー・フォードは、おかあさんにやくそくしたように、きかいのべんきょうを熱心にしました。会社へつとめたあと、一九〇三年には、じぶんでフォード自動車会社をつくりました。のちには、『自動車王』とよばれるほど大きな会社になりました。いまもフォードの自動車は、世界中を走りまわっています。

努力のたまもの

きちがい きざえもん

——赤えの有田やきをつくりだした柿えもん——

柿の色のうつくしさ

きざえもんは、きょうもうらにわにでて、柿の木をみあげています。柿の木には、じゅくした実が、いっぱいなっています。そのひとつぶひとつぶが、日にかがやいてなんともいえないうつくしさです。

きざえもんは、おもわず、ためいきをつきました。

（どうして、あの色が、やきものにだせないのだろう。）

きざえもんは、やきものづくりのしょく人です。もうなん年も、柿の実のうつくしい色を、やきものにだそうと、く心してはしっぱいばかりしています。

そんなきざえもんを、村の人たちは、ゆびさしてわらいます。

「ほれ、きざえもんが、またばかづらで、柿の木をみているぞ。」

「あいつは、気がふれたんじゃ。」

「そうとも。ちゅうもんのやきものを、みんなことわって、柿の色を、やきものにだそうとしているというではないか。どうせ、むりなことじゃ。」

「あのおちぶれようはどうじゃ。気のどくなのは、びんぼうぐらしのおかみさんよ。」

あざけりの声も、きざえもんの耳にはいりません。

（できる。きっとできる。よし、こん度

はぬりぐすりをかえてみるぞ。）

せかせかと、しごとばへはいっていきます。

きざえもんをはげましてくれるのは、やきもの商人のとくえもんでした。

「がんばってください。きざえもんさん。わたしは、長崎（九州）へいったときに、清（いまの中国）の人にきいたことがある。清には、赤えという、うつくしいやきものがあるということです。ぬりぐすりと土のあんばいで、それはきっとできるはずです。それをさぐりあてるのが、だいじなんです。」

きざえもんも、目をかがやかせます。

「わたしもそうおもいます。やきものは、あい色ひと色とおもいこんでるほうが、おかし

い。はじめにそのあい色を、やきものにだした人も、身をけずるくろうをしたにちがいありません。わたしのくろうなど、まだまだたりないのです。」

しかし、きざえもんのくぼんだ目、やせた体は、きょうまでのくろうが、なみなみでないことをしめしています。

とくえもんは、お金のつつみを、そっときざえもんのまえにおきました。

「これは、やきものをやく、まきだいにしてくだされ。」

きざえもんは、ふかくあたまをさげるだけです。もうまきをかうお金も、なくなってきているのです。きざえもんに心配させまいと、つまがひとり、くろうしているのをよくしっています。きのうも、そのつまがなみだぐんで、ためいきをついているのをみました。

（なにくそ。これくらいのことに、まけるものか。わしはきっと、あのかがやく柿のうつくしさを、やきものにだしてみせるぞ。とくえもんさんのはげましにたいしても、きっとしあげてみせねばならん。）

きざえもんは、あたらしいけっ心で、ちかいました。

家をこわして

かまをあける
日、きざえも
んのむねは、
きたいと
不安で

いっぱいです。

（こん度こそ、うまくいっていてくれ。）

つまもそばにきて、きざえもんの手もとを、いきをつめてみつめています。

ひとつひとつ、かまからだすやきもの。

（ああ、やっぱりだめか。）

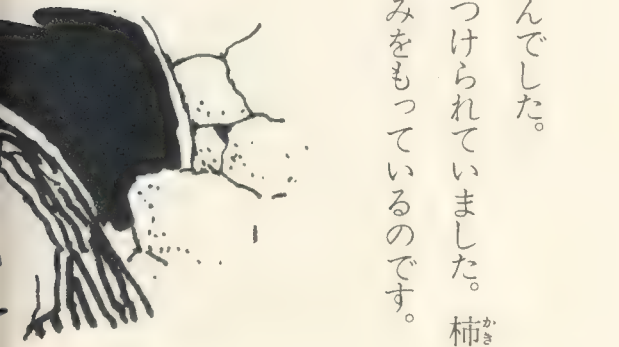
あのかがやくうつくしい色は、どのやきものにも、でていませんでした。

がっくりしたきざえもんは、ふとその中のひとつに、目をすいつけられていました。柿の色にはとおいのですが、やきもののある部分が、わずかに、赤みをもっているのです。

「うむ。」

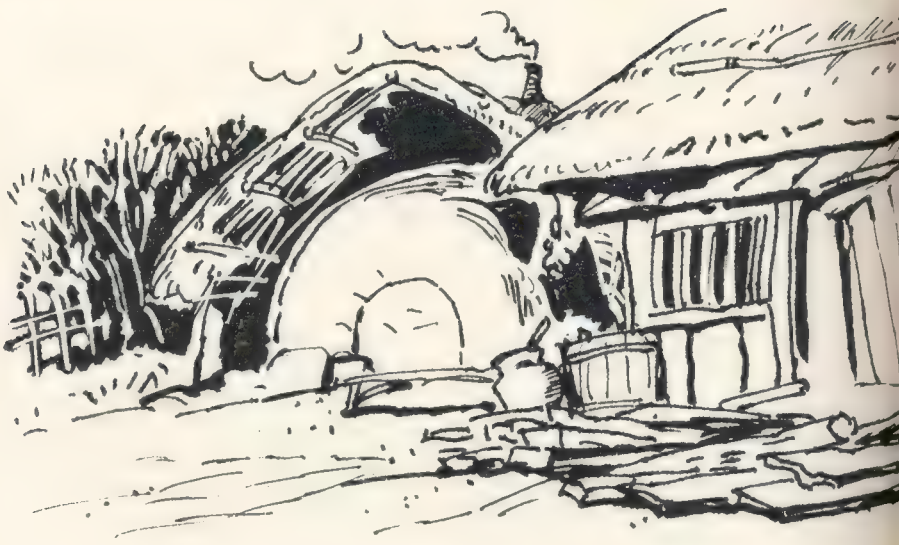
夢中でとりあげると、くいいるようにみつめます。このぬりぐすりと、この土はどこのものだったか。

きろくしておいたところを、夢中でしらべます。ある部分だけ赤みをおびたというのは、そこになにかがまじったのです。



きざえもんの死にものぐるいの、しごとがはじまりました。
しっぱいしては、またかまをやきます。
そんなある日、一つうの手紙がとどきました。その手紙を
よむと、きざえもんのかお色がかわりました。
小さいうめき声をあげて、しゃがみこんでしまいました。
「どうしたんですか。」
心配したつまが、のぞきこみます。
「とくえもんさんが……、とくえもんさんがきゅう病で、
なくなったというしらせだ。」
「えっ。」
つまも、そのままかおを、おおってしまいました。
まだ柿の色のやきものは、できあがりません。このまえ、とくえもんからもらったお金
も、とっくになくなっています。そしていま、たったひとりはげましてくれていた、とく

えもんも死んでしまったのです。
きざえもんは、体中から、力がぬけるようでした。
しかし、力をおとしてはいられません。
（とくえもんさんのためにも、赤えのやきものを、やかねばならん。）
きざえもんは、心をふるい立たせました。
こん度こそ！あたらしくくふうしたぬりぐすりに、きざえもんは、大きなのぞみをかけていました。
（これが、さいごのかまになるかもしれない。）
いのるおもいで、かまに火をつけました。
きざえもんは、いそがしくつまにいいました。



「わしは、金のくめんにいってくる。このかまがあがるまでのまきを、よういせねばならん。よいか、しっかりかまの火を、もやしつづけていてくれ。たのんだぞ。」

きざえもんのつまは、いっときも、かまのそばをはなれません。火の色をみながら、いのちがけでもしつづけます。

ああ、もうまきがなくなる。

つまは、気が気でありません。きざえもんはなかなかもどってはきません。まきがなくなれば、このかまのやきものぜん部が、だめになるのです。

きざえもんのつまは、きっと立ちあがりまし

た。そして、まわりをみまわしました。

いきなりおのをとると、じぶんたちのすまいを、こわしはじめました。こわしては、はしからもやしていきます。ほのおをあげてもえる火。つまの目もほのおのようです。

かえってきたきざえもんは、ひと目で、じじょうをしりました。

「よくもやしつづけてくれた。まきはすぐくるぞ。」

ふたりがかりで、かまをもしました。

やがて、かまをあける日がきました。

きざえもんは、大きくいきをすいこみました。ふるえる手でかまをあけます。

中からとりだしたやきものを、手にするなり、きざえもんの目から、なみだがあふれました。

「これじゃ！できたできたぞ！柿の色がだせたぞ。」

「ああ、おめでとう。あなた。」

つまもないています。

「とくえもんさん、みてくだされ。赤えのやきものができましたぞ。みてくだされ！」

にわには、柿の実がすずなりです。おりからの夕日をうけて、たからもののように、かがやいています。

目のまえのやきものは、その柿の実にまけないうつくしさでした。

（おわり）

❀ きざえもんは三百年ほどむかし、ひぜんの国、いまの佐賀県に、生まれました。おとうさんはかわらしょく人でした。柿えもんというなまえになったのは、柿のえのついた赤えのふたものを、ばくふにさしあげたとき、あまりのみごとさに、柿えもんというなまえをもらったのだということです。赤えのやきものは、オランダ人の手で、ヨーロッパや南の国ぐににまでうりひろめられました。いまも有田やきとして、おおくの人にだいじがられています。

うち中でサイクリング

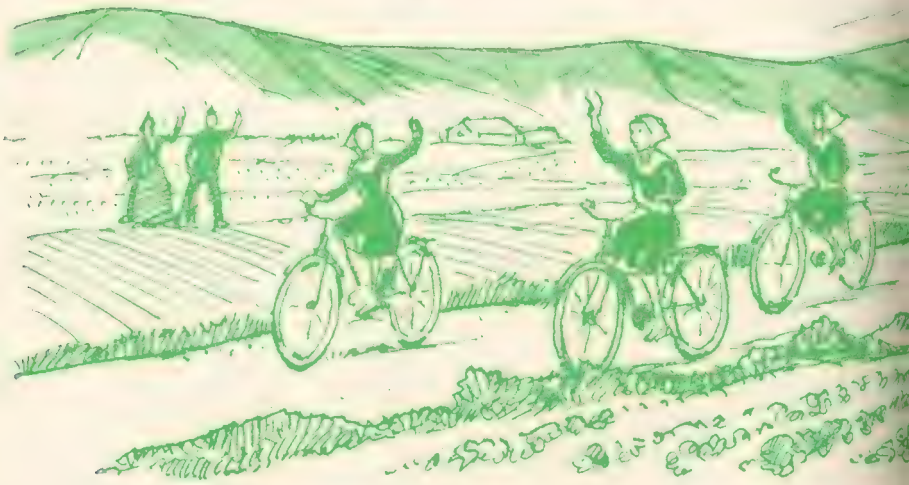
あかるくはれた、オランダの五月のいなか道です。

小鳥がさえずりながら、たかくとんでいきます。それをおいかけるように、五だいの自転車が走っていきます。

三人のかわいい女の子たち。それをまもるようにつづく、おとうさんとおかあさんの自転車。女の子たちも、おとうさんやおかあさんも、気品のある、うつくしい人たちです。

女の子のひとりが、いきいきとさけびます。
「あのもりまできょうそうよ。だれが一ばんにつくか、いい？」
ほかの女の子たちも、口ぐちに、
「すてき！わたしが一ばんよ。」
「あら、わたしこそ！」
三人は、ぶつかりそうにペダルをふんで、とびだしていきます。
おとうさんもおかあさんも、にこにこしながら、それをおいかけていきます。
むこうからきた、お百しょうが、立ちどまると、目をみはって五人をみました。

そして、したしみをこめたえがおでえしゃくしました。
おとうさんもおかあさんも、女の子たちも、たのしそうに、お百しょうに手をふっていきます。
かけてきて、手をふる子どもたちもいます。
畑から、手をふっているお百しょうもいます。
「あれは、どなたたちですか？」
とおりがかった外国人が、ふしぎそうにききました。
「どこかでみたような、かたたちだが……。」
「しらないのですか。」
お百しょうは、いいました。
「あれは、ユリアナ女王さまのご一家ですよ。」
「あのかたたちが？」
こん度は、外国人のほうがおどろきました。



「オランダ国王の、ユリアナ女王さまですか。」
あらためて、五人のうしろすがたをみおくっています。
五だいの自転車は、もう小さくなっていました。
ユリアナ女王は、よくこうして、うち中で、サイクリングにでかけました。国みんにまじってかいものもしました。
「わたしは、みんなとおなじ、ひとりの母おやでありつまです。女王であるのは、国のしごとをしているときだけです。」
と、いいました。

けいさつからの電話

ここは、きゅうでんの中のひろい部屋です。どっしりしたつくえ、みごとなシャンデリア。

ユリアナ女王は、熱心に、だいじんのせつめいをきいています。

そこへ、おつきの人が、いそぎ足ではいってきました。ふたりのようすをみると、こまったように立ちつくしました。

女王もだいじんも、ふりむきもしません。

おつきの人は、まちきれなくなって、えへんと、ひとつせきばらいをしました。

それでもふたりは、しらんかおです。

とうとう、おそるおそる声をかけました。

「女王さま、お電話でございます。」

女王は、はじめてふりむきました。

「だれからですか？あとにしてほしいので

す。いま、だいじな話をしているのですから。」
「それが、けいさつからでございます。」
「けいさつ？」
だいじんが、むきなおりました。
「けいさつならわたしにではないか。女王さまにちょくせつかかるわけがない。まちがいではないのか。」
「いいえ、まちがいではございません。たいへんきょうしゅくしていますが、けいさつでは、女王さまにじかにもうしあげたいといっています。」
「ききましょう。」
と、女王はいいました。
「電話をまわしてください。」

そして、

「わたしがユリアナ女王です。

どんなようじなのですか。」

と、ゆっくりいいました。

あい手は、こまったようすで、しどろもどろしながら、

「じつは……まことにもうしあげにくいことですが……、

王女さまがこうつういはんを……なさいました。」

ユリアナ女王のかおが、くもりました。

「じこがあったのですか。」

「いいえ、さいわい、じこはおきておりません。王女さまと、四人のお友だちのかたが、赤しんごうのこうさてんを、おわたりになりました。ちょうど自動車もきておりませんでしたし、じこはおこりませんでしたが、みなさん、たいへんふざけながら、おわたりになりました。そこへ、けいかんがいあわせておりまして……。」

「それで？」

「はい。けいかんはみなさんを、けいさつへつれてきてしまったのでございます。なに分にも、子どもたちは、しんごうをまもることを、きびしくちゅういしておりますので……。」

「とうぜんです。それで？」

「けいさつでは、王女さまだとわかりまして、おかえりいただこうとおもったのですが、おききになりません。わたしも、みんなとおなじことをしたのだから、友だちとおなじにしてほしいとおっしゃるのです。」

「そのとおりだとおもいます。けいさつでは、どうするのですか。」
「父おやか、母おやをよびだして、よくちゅういして、子どもをひきとらせるのですが。」
女王は、にっこりしました。
「どうぞきそくどおり、やってください。わたしはすぐにいけませんが、かわりをやります。たとえ女王の子どもでも、きそくをまもるのはあたりまえのことです。きびしくいいきかせてください。」
「はあ、まことにもうしわけありません。」

「もうしわけないのは、こちらです。ごくろうさまでした。」

そしてまたユリアナ女王は、だいじんのせつめいに、熱心に耳をかたむけました。

「わたしのしつけがわるくて、はずかしいとおもいます。王女たちは、とくべつの子どもたちではありません。おなじ国みんのひとりです。」

女王は、あとでおつきの人にいいました。王女がよくいいきかされたのは、もちろんです。

（おわり）

※ ユリアナ女王は、男のきょうだいがなかったので、女王になる人としてそだてられました。しかしおかあさんのウィルヘルミナ女王は、女王も人間ですよと、いつもいいきかせました。オランダにこう水があったとき、だんなさまのそうじゅうするヘリコプターにのって、どろ水のはねあがる中を、みんなをはげましてあるいた話は、ゆうめいです。

友じょうの登山隊

マカルーの日しょうき

——日本とフランス登山隊の話——

そびえ立つマカルー

ヒマラヤの山やまは、まっ白な雪をいただき、かさなりあって、そびえています。

マカルーは、その中で五ばん目にたかい、八四八一メートルの山です。なん千年、人をよせつけないみねみねは、きびしい白さで目にしみます。

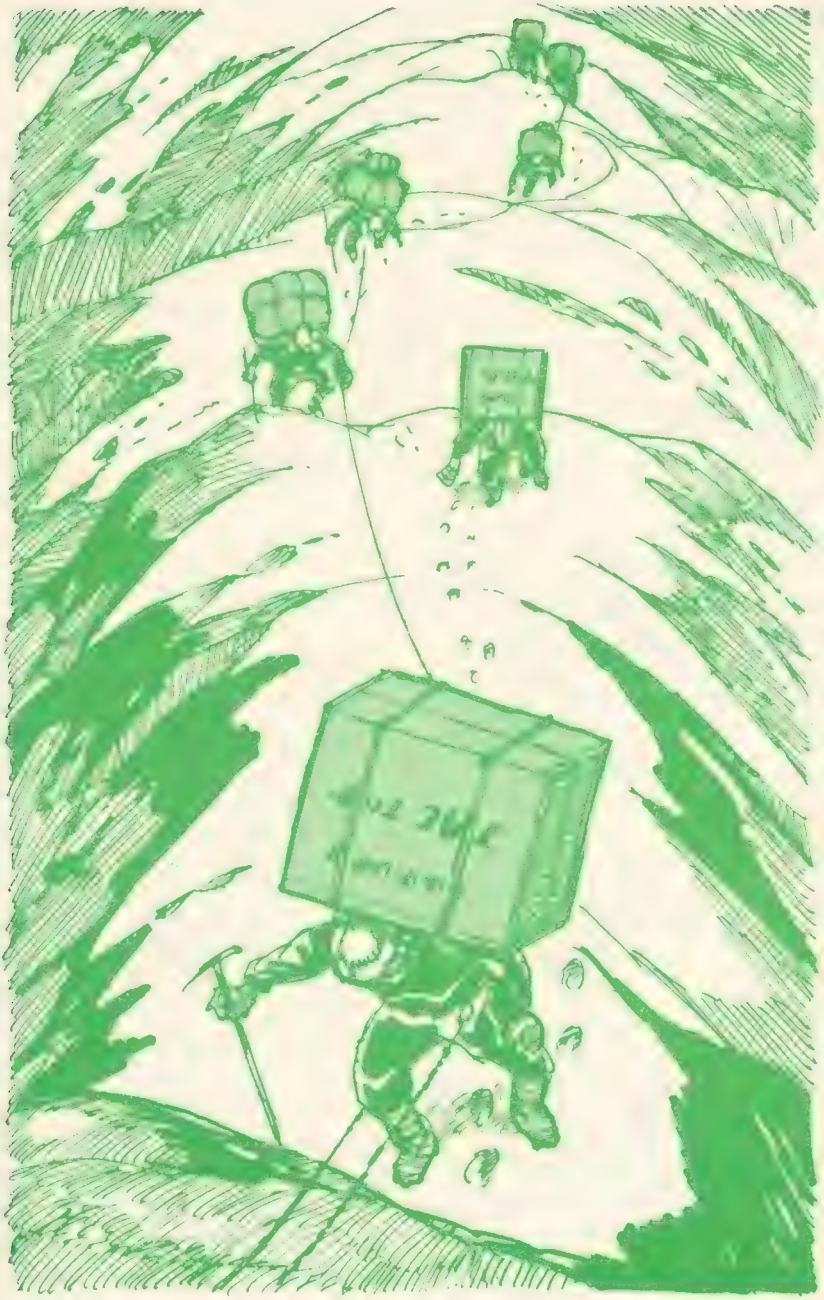
一九七〇年（昭和四十五年）二月、日本山岳会東海支部の、二十人の隊いんたちは、ほおをひきしめて、その雪をあおぎみました。雪あらしでも、おこっているのでしょうか。マルカーのいただきは、くもがかかったように、かすんでいます。

（きっと、登山をせいこうさせてみせるぞ。）

はらまこと隊ちょうをはじめ、どの隊いんの目も、かたいけっ心にかがやいています。

けいかくは、五年もまえから立ててきました。ネパールの国が、外国人の入国をとめていたので、おくれたのです。

ネパール国の登山のきちは、ごったがえしています。



道あんないのシェルパ、にもつをはこぶ四百人のポーターたち。しょくりょう、い服、テント、さんそボンベ、登山どうぐ。やく十トンものにもつを、かたやせ中にしょって、しゅっぱつです。

ポーターの中には、はだしで雪をふみしめていくものもいます。

隊いんのひとりが、おもわず大きな声をだしました。

「だめじゃないか。みんなに一そくずつ、ながぐつがわたしてあるはずだ。」

「へい気、へい気、だんなさん。」

ポーターは、元気のいいかおで、ぐいと、にもつをしょいあげながら、わらいます。

「わたしたち、足つよい。ながぐつはく、あるきにくいね。はっはっはっ。」

さいしょのむずかしいばしょは、四二〇〇メートルのシプトンとうげでした。そのとうげに登りきらないうちに、もうれつな雪あらしが、おそってきました。

うなりをもってふきつける、三十メートルのかぜ。つもった雪までまきあげて、もう、いきもとまりそうです。せ中やかたにしょったにもつが、いっぺんに、おもくのしかかっ

てきます。まえをいく人の足あとへ、ひと足ひと足、ついていくのですが、足をふみはずせば、こおりのわれ目が口をあけています。なん百メートルも下まで、ま一もんじにおちてしまうのです。

ようやくかぜがよわくなって、ひとやすみしたとき、はら隊ちょうは、みんなをはげまして、ごうかいにわらいました。

「このモンスーンは、マカルーのわれわれへの、かんげいの手はじめだぞ。へこたれちゃだめだ。」

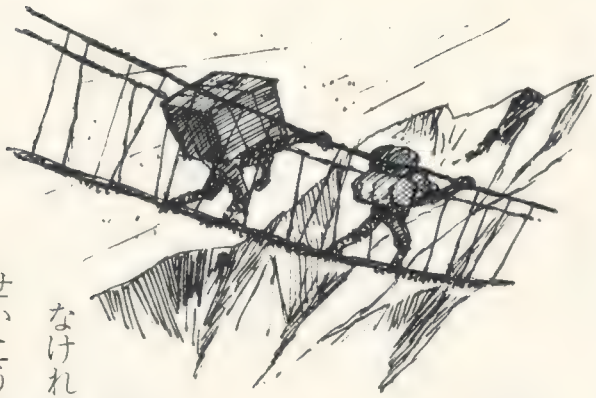
しかし、青ざめたポーターたちは、さわぎだしました。

「こんなはげしいモンスーン、しらない。いのちだいじね。ベースキャンプまでいく、やくそくやめる。」

いまにも、にもつをなげだしてかえろうとします。

はら隊ちょうが、いくらなだめてもだめです。隊ちょうは大いそぎで、ポーターぜんいんに、やくそくいがいの、ぼう水ぎをわたしました。そして、おれいをよけいだすことで、

ときふせました。
（これはモンスーンより、ほねがおれるぞ。）
と、隊ちょうはおもいました。



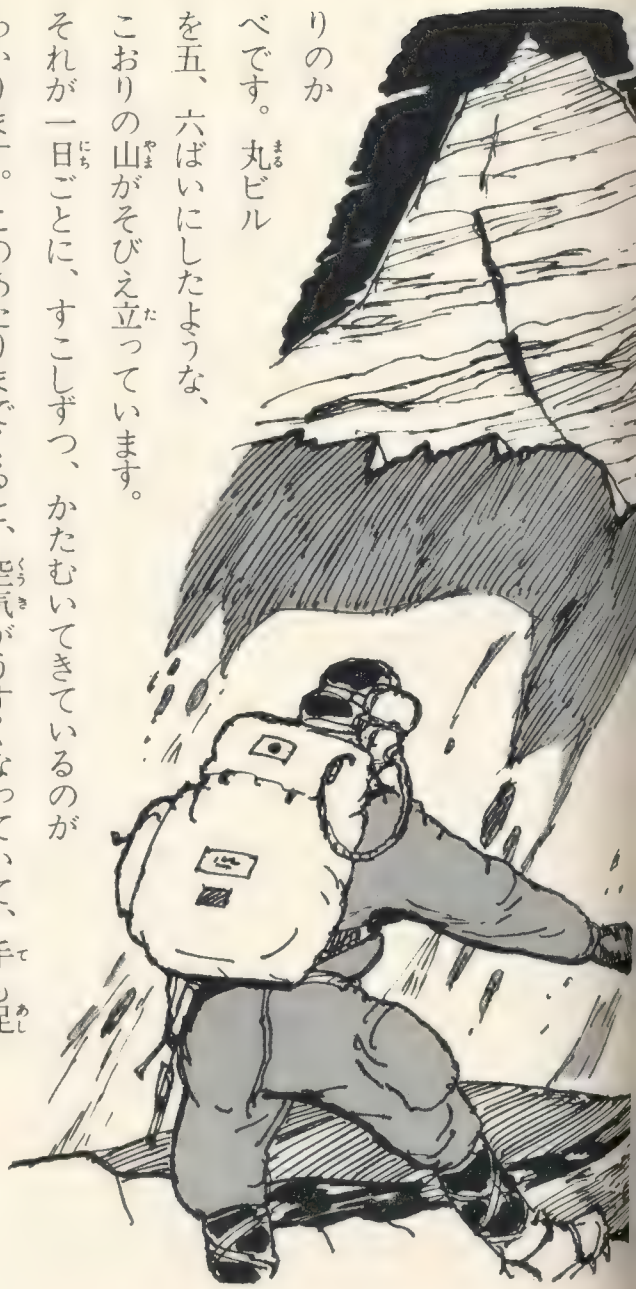
チベットの国ざかいを下にみて

ベースキャンプは、登山隊をさしずする本部です。はら隊ちょうは、ここでしきをとります。

登山隊がしゅっぱつするまえの夜、シェルパたちによって、山のいのりがおこなわれました。登山は、隊いんみんなが、力をあわせなければできません。その上、天気もよくなければなりません。シェルパたちはひざまずいて、そのぶじと、せいこうをいのります。

この日もマカルーは、青い空に、雪けむりをふきあげていました。
いよいよ隊いんたちは、ふたりひとくみになって、つぎつぎしゅっぱつしていきます。
かわぐち、ごとう。はせがわ、こしやま。たなか、おざき。いちかわ、あさみ。いくた、しらはた。などの人たちです。登りながら、第一、第二とキャンプをつくっていきます。
五月十五日、かわぐち、ごとうのふたりは、七六〇〇メートルの氷河(あついこおりのかたまりの川)に、キャンプ5をつくりました。

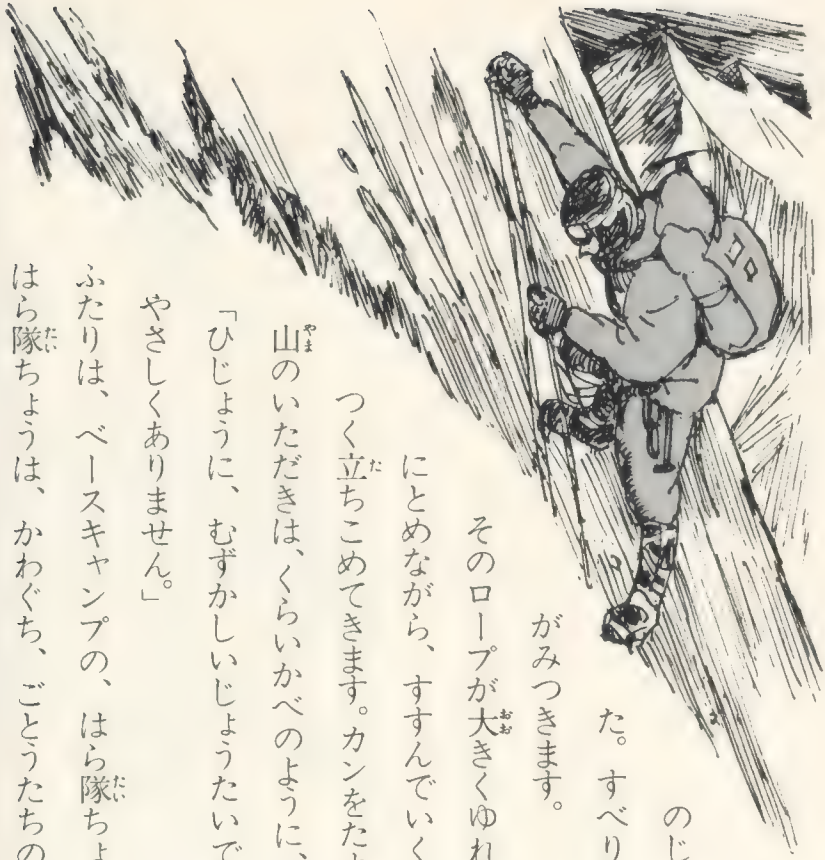
「おい、あれがチベットの国ざかいだぞ。」
目の下はるかむこうの、山をゆびさしながら、かわぐち隊いんがいいます。
「いよいよ、これからだぞ。」
「がんばろう。」
まわりはみな、
いわとこお



りのかべです。丸ビルを五、六ばいにしたような、こおりの山がそびえ立っています。それが一日ごとに、すこしずつ、かたむいてきているのがわかります。このあたりまでくると、空気がうすくなっていて、手も足も、おもうようにうごきません。くつをはくのにも、一時間もかかってしまいます。

ふたりのせ中では、さんそボンベが、シューシューと音を立てています。ふたりは、それをせ中にゆすりあげて、登りつづけます。

はせがわ、こしやま隊いんたちは、べつのコースから、頂上への道をしらべていました。



八〇〇〇メートルをすぎたあたりから、きゅうに雪のじょうたいが、わるくなりました。すべりかけて、おもわずロープにしがみつきます。

そのロープが大きくゆれます。ロープをこおりのかべにとめながら、すすんでいくのです。ガス（こいきり）があつく立ちこめてきます。カンをたよりにすすむふたりのまえに、山のいただきは、くらいかべのように、ガスの中にうきあがります。

「ひじょうに、むずかしいじょうたいです。このコースは、けっしてやさしくありません。」

ふたりは、ベースキャンプの、はら隊ちょうへほうこくしました。

はら隊ちょうは、かわぐち、ごとうたちのコースをとって、登るように

さしずしました。

つかれきった、はせがわ、こしやまの隊いんは、キャンプ4までおりてやすみます。かわりに、四人の隊いんが、キャンプ4をでました。こうしてぜん部の隊いんが、力をあわせ、たすけあって登るのです。

キャンプ2と、キャンプ3のあいだでは、にもつあげが、おこなわれていました。あたらしくキャンプをつくるたびに、たべものや、さんそボンベや、テントなどのにもつを、はこびあげねばなりません。

あしや隊いんは、シェルパにつきそって、ひざからこしまである雪の中を、ひと足、ひと足、登っていました。雪がはげしくふきつけるので、一時間かかって、十メートルもすすめません。

と中まで登ったとき、白い雪けむりとともに、なだれがおそってきました。

「あっ。」

さけび声とともに、あしや隊いんのすがたがきえました。

シェルパたちは、かお色をかえました。三十メートルぐらい、ながされたところで、あしや隊いんの、元気なすがたが立ちあがりました。

「だいじょうぶですよう。」

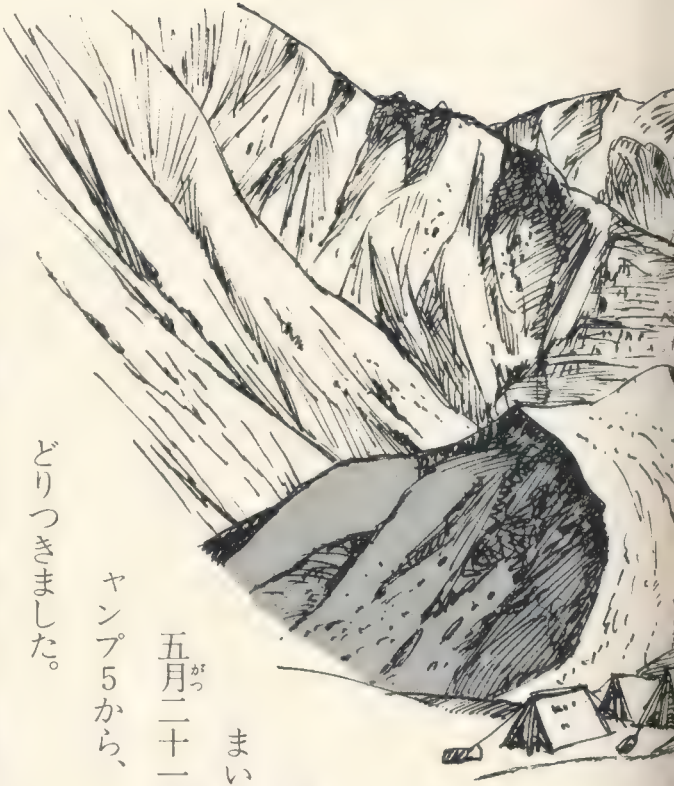
にこにこさけんで、大きく手をふっています。

シェルパたちは、あしや隊いんを、たすけあげながらいいました。

「わたしたち、やくそくまもる。がんばって。きっと登山せいこうさせる。」

かえらない隊いん

かわぐち、ごとうの隊いんから、ベースキャンプに、



ほうこくがはいりました。
『キャンプ6をぶじにつくりました。しかし、むせんき、こしょう。ちょうしわるし。』
それっきり、れんらくがきれてしまいました。
五月二十一日、たなかとおざき隊いんが、キャンプ5から、へとへとになってキャンプ6にたどりつきました。
しかし、キャンプ6にはだれもいません。もう夕がたの六時でした。
「おかしいな。かわぐちたちは、どうしたんだろう。」
「なにか、かきのこしてないか。」
せおいにもつも、そうびもありません。

「頂上目ざして、でていったのだな。」
しかし、ふたりはもどってきません。
一日たちました。
ボンベのさんそは、まだあるのだろうか。
体はもつのだろうか。そのあいだにも、
テントからかおもだせないほど、はげしい
あらしが、雪をまきあげてつづきます。
ふたりは、どこで、このあらしをさけている
のでしょうか。
ベースキャンプでは、むせんきのスイッチを、
いれっぱなしにして、ふたりのしらせをまってい
ます。しかし三十分おきにはいるしらせは、
『かわぐち、ごとう、まだかえらず。』

ベースキャンプは、だんだんおもくるしい空気に、つつまれていきます。

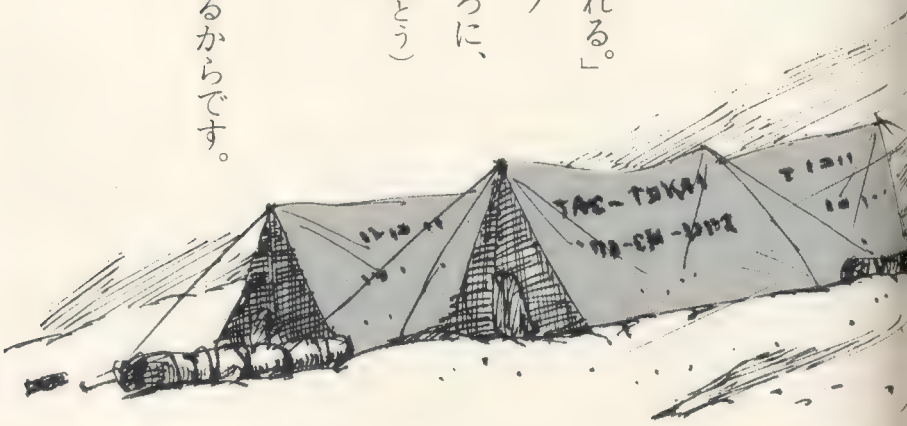
はら隊ちょうは、ついに、ぜん隊いんにしらせました。

「かわぐち、ごとう隊いんは、そうなんしたものとおもわれる。たなか、おざき隊いんは、ようすをみるために、キャンプ6をでて、登っていきました。百メートルほど登ったところに、かわぐちとごとう隊いんの、ヘッドランプ（あたまにつける電とう）をみつけました。

『ヘッドランプ、もちかえれ。』

はら隊ちょうは、さしずしました。ふたりのかたみになるからです。

頂上目ざして



それよりまえ、五月二十日のことです。

かわぐち、ごとうのふたりは、キャンプ6から、マカルーをあおいでいました。よくはれたいい天気です。しかし、五〇〇〇メートルから一〇〇〇〇メートルへかけて、空の一部に、くもがいくえにも、かさなりあっているのがみえます。

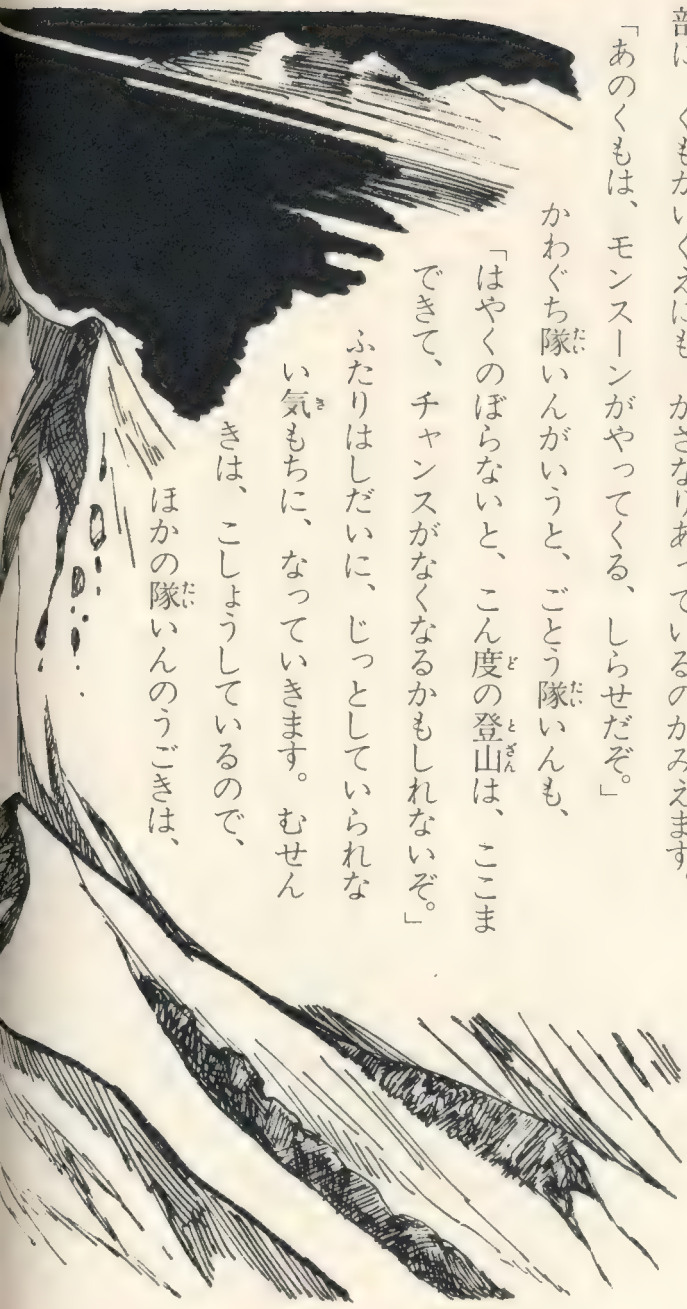
「あのくもは、モンスーンがやってくる、しらせだぞ。」

かわぐち隊いんがいうと、ごとう隊いんも、

「はやくのぼらないと、こん度の登山は、ここまできて、チャンスがなくなるかもしれないぞ。」

ふたりはしだいに、じっとしていられない気もちに、なっていきます。むせんきは、こしょうしているので、

ほかの隊いんのうごきは、



まるでわかりません。

二十一日、夜中におきだして、キャンプ6のテントをでたのです。月がうすくさしています。かぜはまったくありません。やりのようにとがった山やまが、ふたりをみおろしています。

ふたりは、きのうじぶんたちが、と中まではっておいたロープをつたって、いわを登りました。こおりのかべをはい登ります。

山の天気は、すぐかわります。つよいあらしがおそってきました。雪はするどいいたさで、かおにふきつけます。さんそボンベもおもくて、

ひとつはすてました。もうひとつも、さんそがなくなってきました。いきぐるしさにあえぎながら、ただ足をまえにすすめるだけです。このまま頂上についても、そこに立てるはたも、しゃしんをとるためのカメラも、もっていません。そんなことを、ふたりはおもいうかべもしません。ただあるきつづけるだけです。

（マカルーの頂上が、よんでいる。）

あたりは日がくれて、くらくなってきました。

かわぐち隊いんが、夢をみているように、いいだしました。

「あそこで、ネパール人がテントをはっているぞ。

うまそうなくいものを、つくっている。はやくいこう。」

すると、ごとう隊いんも、うわごとのように。

「ああ、おれたちだけじゃないよ。はせがわもこしやまも、

たなかもあさみも、きているじゃないか。よかったなあ。おまえたちいつきたんだ。」

ふいにつよいかぜが、ふきつけます。ふきとばされそうに、ぐらりと体がゆれます。

はっとして、足をふんばると、もうネパール人も、あたたかいしょくじも、なかまの隊いんもきえています。雪あらしの中を、ふたりきりであるきつづけているのです。

「頂上は、すぐだ。がんばろう。」

あそこが頂上だ。そうおもって登ると、すぐまたむこうに、またおなじような頂上がそびえ立っています。わずか五十メートルさきのいただきが、マカルーのいただきのような気がします。しかし、そこまでいけば、またそのさきに、あたらしいいただきが、あらわれるかもしれません。

雪あらしは、なおもはげしくおそってきます。サングラスは、とっくにわれています。雪めくら（雪のてりかえしで、目をいためること）にやられて、ほとんど目がみえなくなっています。かおのひふもかわがむけて、ひりひりいたみます。

ふたりは、体中の力をだしきったようになり、ぐったりとしてこしをおろしました。

「もうだめだ、かえろう！」

すると、きゅうにおそろしさが、おそってきました。

どこをどのようにもどったのか、おぼえていません。雪をすべりおりました。いわかどをはいおりました。夜くらくなった中で、夢中で雪あなをほり、だきあうようにして、ころがりこみました。

つぎの日は、よい天気でした。雪のはんしゃがつよくて、目ははげしくいたみ、とてもあいてはいられません。やっとじぶんたちがはったロープのはしまで、たどりつきました。

そのとき、むこうで大きなよろこびの声が、ばくはつしました。

「かわぐちっ、ごとう！生きていたかっ。」

さがしにきた、たなか、おざきの、ふたりの隊いんでした。

ベースキャンプは、そのうれしいしらせにわき立ちました。そうしきの話まで、でていたのです。

マカルーの日しょうき

五一〇〇メートルふきんの氷壁を、ロープをつたって、登っている隊いん。

（隊いん白籏史朗・撮影）

ねずみをまんがに　ウオルトは、夜のふけるのもわすれて、夢中で、ねずみのスケッチを、かきつづけました。（149ページ）

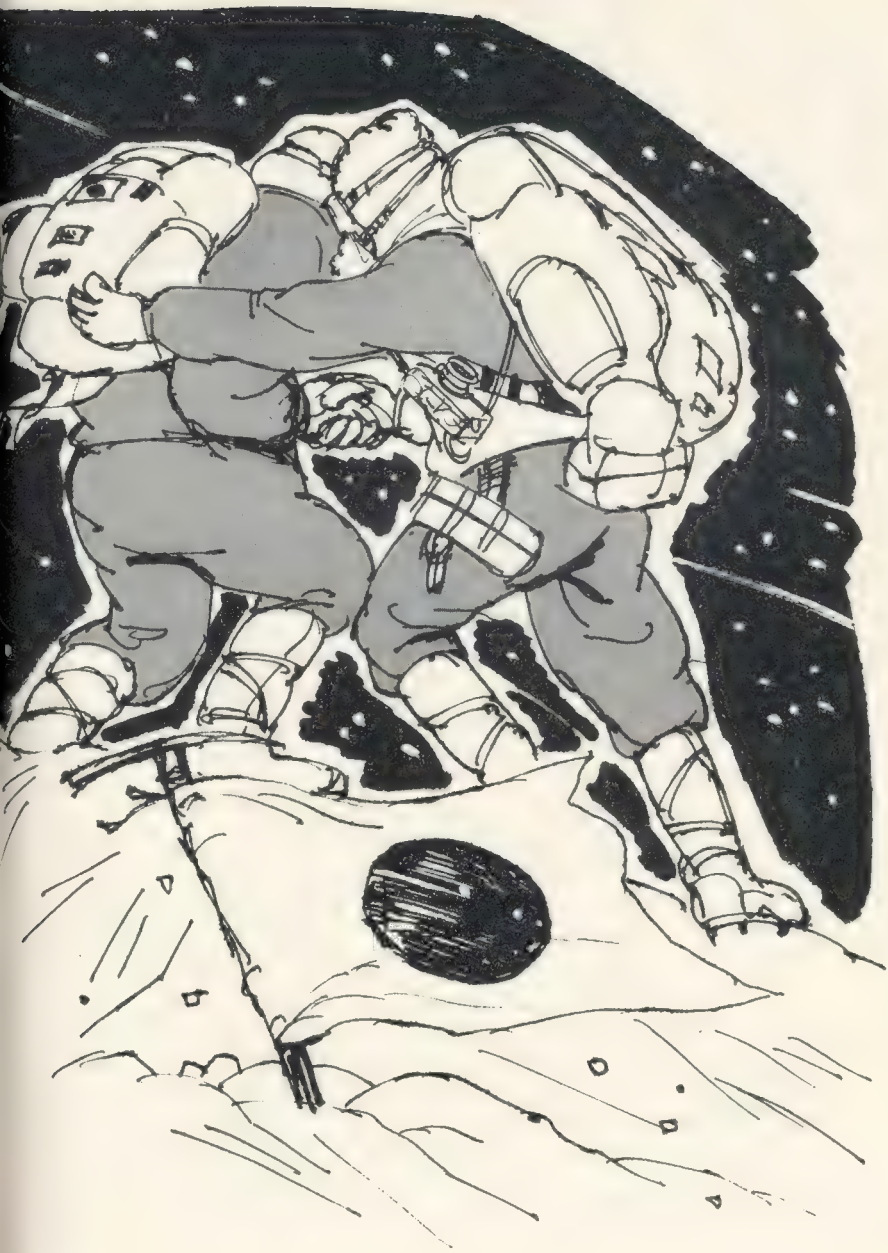
おくられてきたしゃしん

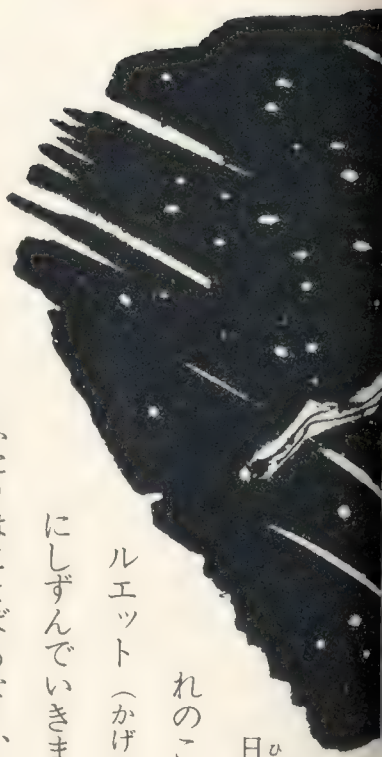
キャンプ6からは、あたらしく、たなかとおざきの隊いんが、頂上へむけて、しゅっぱつしていました。キャンプ6から、ふたりのすがたがよくみえます。

いちかわ隊いんは、十六ミリカメラで、そのすがたをうつしつづけています。雪の上にでたふたりの、赤い羽毛服（鳥の羽がはいったさむさをよける服）が、夕日にかがやいています。やがてふたりのすがたは、山のむこうへきえました。

いよいよ頂上へちかづいたのです。まえに、かわぐち、ごとうのふたりが、五十メートルむこうにみたのは、やはりマカルーの頂上だったのです。

たなかとおざきは、いわだらけのみねの下につきました。日はしずもうとしています。まん中のいわのさけ目を登りました。雪のピラミッドがありました。かけ登りました。てのひらにはいるほどのせまさです。それがマカルーの頂上だったのです。





日はすっかりおちて、西の空だけがくれのこっています。まわりの山やまが、シルエット（かげぼうし）になってかさなりあい、やみにしずんでいきます。

ふたりはことばもなく、しっかりと手をにぎりあいました。日本人としてはじめて、いま、マカルーの頂上に立ったのです。

ふたりはすぐ、しゃしんをとろうとしました。しかし、さっきまでうごいていたシャッターが、どうしてもうごきません。こおりついてしまったのです。しかたなく、日の丸のはたを、アイスアックス（ピッケル・こおりをくだいてのぼるつえ）にまきつけて、雪の中にしっかりとうちつけました。はたは、つよいかぜにはためいています。

頂上をきわめた、しょうこのしゃしんを、とれなかったことは、ざんねんでした。しかし、マカルー登山隊は、隊いんはもとより、シェルパ、ポーターをふくめて、ひとりのじこもなく、ぶじに山をおりました。

それから一年たった一九七一年五月、日もおなじ二十三日のことです。

フランス登山隊が、日本隊とはべつのほうめんから、マカルーに登りました。フランス登山隊も、日本隊にまけないくろうをしました。

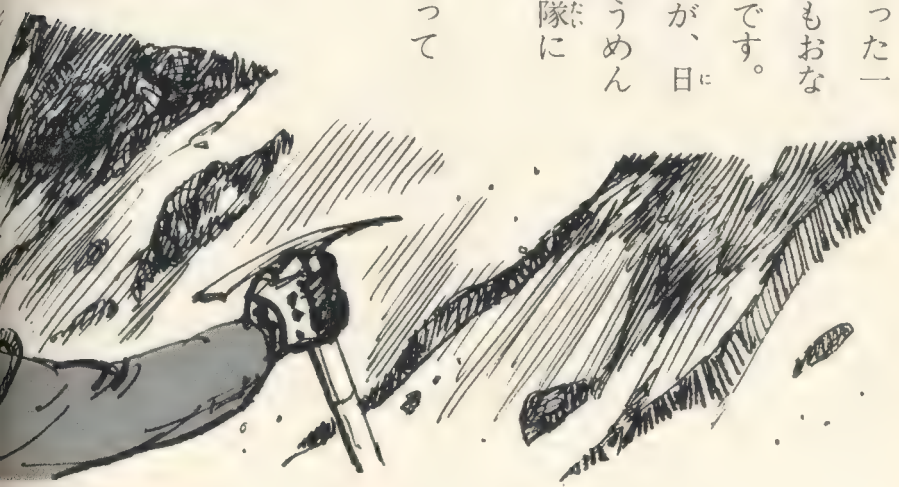
やっと頂上に登ったとき、そこに、雪にはん分うずまってはためいている、はたをみつけたのです。

「おお、ヒノマル！」

「ニホン人の、はた。」

フランスの隊いんたちは、おもわずかけよりました。

はげしいふぶきのおそう八四八一メートルのマカルー

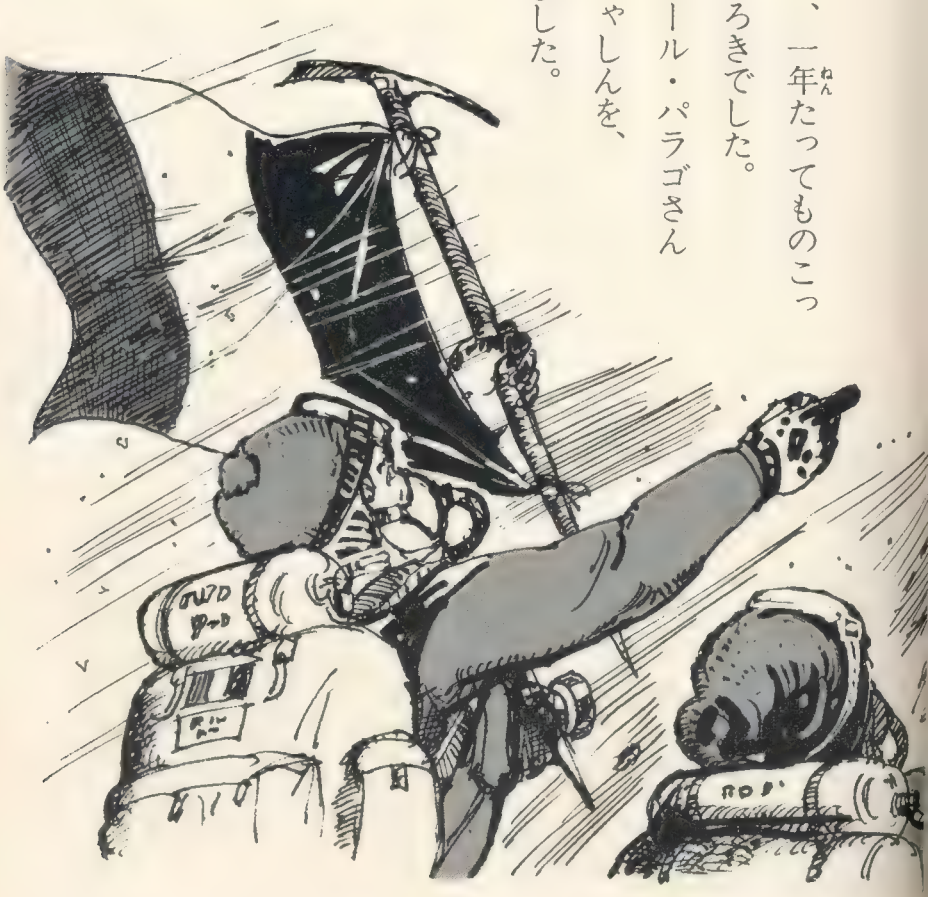


の頂上に、日の丸のはたが、一年たってものこっていたことは、大きなおどろきでした。

登山隊の隊ちょう、ロベール・パラゴさんは、その日の丸のはたのしゃしんを、日本登山隊へおくってきました。

むずかしい、マカルー登山をなしとげた、日本のみなさん。そのせいこうを心からおよろこびします。かんげきをこめて、このしゃしんをおくります。

＊



日本山岳会東海支部の登山隊の人たちは、ふかいかんどうで、それらをうけとりました。すぐには、声をだすものもいません。

せっかく頂上をきわめながら、しゃしんがとれなかったくやしさは、いつもむねにありました。

日本登山隊が、しょうこ立てられなかったそのことを、フランス登山隊が、かわりに、しょうこ立ててくれたのです。しかもわざわざ、そのしょうこのしゃしんを、日本へおくりとどけてくれたのです。

これで日本登山隊が、むずかしいマカルー登山にせいこうしたことが、りっぱに世界中に、しょうこ立てられたのです。

ありがとう。ありがとう。だれの目も、なみだでぬれています。

フランス登山隊の人たちの、大きな友じょうに、ふかいかんしゃのことばをつぶやいていました。（おわり）　**カバー・表紙の写真**は頂上からキャンプ4へかえってきた隊いんたち。

※このお話は日本山岳会東海支部の『遙かなる未踏の尾根―マカルー1970年―』をもとにしてかきました。

心のおくりもの

レオがあげたのは

——ロシア(ソ連)の大作家トルストイ——

レオとおかあさん

レオのにいさんたちをみた人は、みんないいます。

「まあ、かわいいぼっちゃんですこと。」

そして、レオのねえさんをみた人は、

「ほんとにうつくしいおじょうさんですこと。」

でも、レオには、だれもなにもいいません。

ちぢれたかみの毛、ほそい目、あぐらをかいたはな、いかつい体、それがレオ

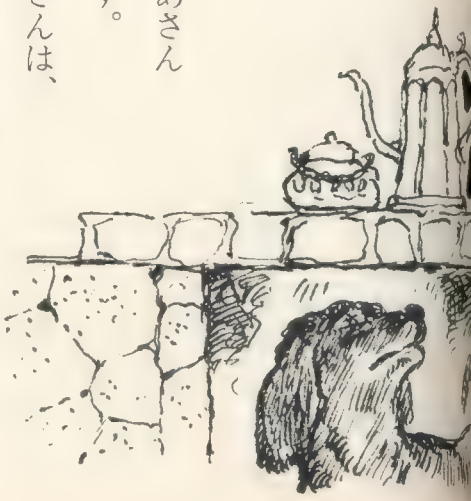
でした。

レオのうちは大地主でしたから、いつもおきゃくさんがあります。レオはその人たちにあうのが、いやでした。

あるとき、おかあさんは、レオのかみの毛をなでながら、いいました。

「レオや、おまえはかおやすがたで、人からほめられようと、おもうんじゃありませんよ。」

レオは、だまっておかあさんをみあげています。
「おまえはね、レオ。にいさんやねえさんのように、かわいいかおでもないし、かっこよくもないから。」
レオは、じぶんでそれをしっています。でも、おかあさんからはっきりそういわれるのは、やはりつらいことです。
だまりこんで、うつむいてしまったレオに、おかあさんは、
「レオ、人のねうちは、かおやかたちで、きまるものではありませんよ。神さまは、よくごぞんじです。それにレオ、おまえはにいさんたちいじょうに、やさしい心をもっていることを、おかあさんは、よくしっていますよ。」
おかあさんのことばは、レオのむねにしみました。
「ありがとう、おかあさん。」
レオは、にっこりしました。そしてじぶんは、けっしてそとからみたかたちで、人のねうちをきめるようなことは、すまいとおもいました。



ある冬の、さむい日のことです。
レオは、友だちのアレクセイや、セルゲイと原っぱをかけまわって、あそんでいました。雪をふくんだつめたいかぜがふきつけて、レオたちのほっぺたは、まっ赤です。
もう日が、くれかけています。
「わーい。」
みんなは、われさきにとかけだしました。
レオたちがかえる道のむこうから、せを丸くしたおじいさんが、あるいてきます。

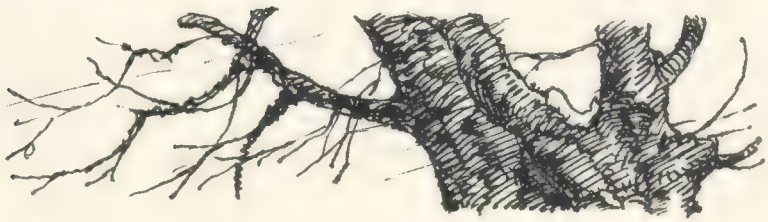
大分つかれているらしく、足もともあぶなげです。ちかづくと、身なりのまずしいのが、ひと目でわかります。このさむさに、オーバーもきていません。身のまわりのものがはいっているらしいふくろを、ひとつもっているだけです。

すれちがったとき、おじいさんは声をかけました。

「元気なぼっちゃんがた、おたすけください。わたしは、とおいシベリアから、国のむす子のところへかえる、たびのものです。と中でおいはぎにあって、こんなありさまになりました。なにか、おめぐみくださいませんか。」

レオたちは、いっぺんに立ちどまって、もじもじしました。めぐんでほしいといわれても、原っぱを走りまわって、あそんでいたレオたちは、なにももっていません。

とつぜん、アレクセイが、うれしそうにさけびました。
「あっ、ぼく、おやつにもらったむしパンの、のこりをもってたんだ。」
ポケットから、小さいむしパンをだしました。
「おじいさん、これでもいい？」
「ありがとうございます。おお……。」
おじいさんは、おしいただくと、かぶりつくようにたべだしました。
セルゲイもレオも、あっけにとられてみています。
たべおわったおじいさんは、しょぼしょぼした目で、セルゲイとレオをみています。その目は、もっとたべものをほしいと、ねがっているようです。
「ぼく、ぼく、なにももってないよ。」
セルゲイは、あとずさりしました。そして、
「あっ、たべるものでなくてもいいんなら、ぼく、おこずかいもってる



よ。二カペイカ。」（二カペイカは四円ぐらい。）

「おお、ありがとうございます。しんせつなぼっちゃま。」

おじいさんのことば

いよいよ、レオのばんです。レオは、まっ赤になりました。むねがどきどきしました。レオは、なにももっていなかったのです。

「ごめんなさい
おじいさん。ぼ
く、おやつもお
金も、もってな
いんです。」
レオの声はふ
るえました。とお
いシベリアから、
国のむす子をたよっ
て、かえるというおじ
いさん。こんなにさむそ
うに、まずしいおじいさん
に、なにもしてあげられない

なんて、レオは、なきだしそうになりました。
きゅうにレオは、毛皮のついたうわぎをぬぎました。
「おじいさん、これあげる。」
おじいさんの手におしつけると、かけだしました。そしてレオは、なにをおもったのでしょう、またすぐかけもどってきました。そして、おじいさんにとびつくと、むさくるしくひげののびたほおに、キスをしました。
「ごめんなさい、おじいさん。なにもあげられなくて。元気で国へかえれますように。」
あっけにとられているおじいさんをのこして、
レオはかけていってしまいました。
「レオったら、あんなきたないおじいさんに、よくキスしたね。」
アレクセイがいいます。
「それに、毛皮のついたうわぎなんか

やってしまって、きっとしかられるよ。」
セルゲイも、口をとがらせていいます。
レオは、だまったままです。
（でもいいや。ぼくは、まだうわぎをもっているもの。あのおじいさんは、オーバーもきてなかったんだから。それに、キスしたのはぼくだもの。ぼく、だれにもめいわくかけてないもの。）
「レオの小さいうわぎなんか、あのおじいさ

んに、きら
れるわけないじゃ
ないか。
「レオって、かわってるね。」
ふたりの友だちは、いってしまいました。

レオがあげたもの

その夜、レオたちうち中のものが、ばんのごはんを
たべているところへ、めしつかいがきていいました。
「たびのものだという年よりが、たずねてきました。これを、
こちらのぼっちゃんに、おめぐみいただいたと、いうのですが。」
ひと目みると、レオはおもわずさけびました。

「ああそれ、ぼくがあげたうわぎだよ！」
「その年よりが、どうしても、ぼっちゃんにお目にかかりたいと、いっているのですが。」
レオとおかあさんが、だいどころへでていくと、あのおじいさんが立っていました。
レオをみると、
「おお、このぼっちゃんです。ありがとうございました。ぼっちゃん、うわぎをおかえしにきました。これはいただけません。それにわたくしは、なによりもうれしいおくりものを、いただいたのです。

ながいたびのあいだに、あんなうれしかったことはありません。どこへいっても、わたしは、こじきあつかいでした。

でも、ぼっちゃんはちがいます。

いくらとおくても、むす子のところへかえる元気がでました。ほんとはもうあの原っぱで、たおれそうだったのです。

やさしいぼっちゃま、ありがとうございました。」

おじいさんのほおに、なみだがひかっています。

「よろこんでいただければ、レオもわたしも、しあわせです。」

おかあさんは、いいました。

そして、おじいさんに、あたたかいシチューとパンのお夕はんを、どっさりあげました。

「レオ、おまえは、どんなおくりものをしたの？」

レオは、ほおを赤くしているだけです。レオのむねは、あたたかいしあわせでいっぱいでした。

（おじいさん、ありがとう。）

レオのほうが、おれいをいいたい気もちだったのです。

（おわり）

レオ・トルストイは、ロシア（ソ連）のきぞくの子として生まれました。一生、あたたかなやさしい心をもちつづけた人です。『せんそうとへいわ』『アンナ・カレーニナ』など世界中の人の心をうつ小説を、たくさんかきました。じぶんはしっそなくらしをし、お百しょうに土地をわけてあげたりしました。たびにでて、アスターポポという、さみしい村で病気になり死にました。八十二才でした。

人びとのくらしをゆたかに

三つのみやげ

——土佐のかろう野中けんざん——

海へぶちまけるみやげ

土佐の国（いまの高知県）まつがはなの船つきばには、おおぜいの人があつまって、おきをみつめています。

「もうそろそろ、ごかろうさまの船がみえても、よいころじゃな。」

「ごかろうは、こん度めずらしいみやげを、江戸（いまの東京）からもってかえられるそうじゃぞ。」

「はまぐりというものも、船につんでこられるそうじゃ。たいそうおいしいもの

じゃげな、たのしみなことじゃ。」
みんな、口ぐちにはなしあっています。
高知城のかろう、野中けんざんは、
かろうのしょくについてから、
みなとをひらいたり、
さんぎょうを

おこしたり
することに、
たいへん力をつ
くしました。

「あっ船がみえたぞ。」
ひとりが、おきをゆびさしてさけびます。
「おう、ごかろうさまの船じゃ。」
二そうの船は、ほをふくらませながら、すこしずつちかづいてきます。
へさきに立って、こちらをみているけんざんや、けらいたちのすがたもみえてきました。
「ごかろうさまあー。」
「おまちしておりましたぞうー。」
まちかねて手をふる、船つきばのものにこたえて、けんざんも船の上からゆっくり、手をふっています。やがて日にやけたほおを、にこにこさせたけんざんが、船からおりてきました。
「おかえりなさいませ。」「ごぶじで、なによりでございます。」
家中みんなのあいさつをうけて、けんざんは、

「でむかえ、ごくろうだな。」
そのまま、よういされた馬にのろうとします。
「ごかろうさま。」
でむかえていたものの中から、ひとりがおいすがりました。
「ごかろうさまが、船につんでこられたという、はまぐりとかいうみやげを、ぜひみせていただきとうございます。」
「たいへん、おいしいものとうかがいましたが……。」
「はまぐりか、いかにもよいあじのものじゃ。そうか、みんなたのしみにしていてくれたか。いまみせるとしよう。」
けんざんは、けらいにさしずしました。
「船につんだはまぐりを、あけるがよいぞ。」
けらいは一れいすると、すぐ船のほうへかけていきました。
「おーい、はまぐりをあけえ。」

「おうっ。」

二そう目の船の上で、大きなへんじがありました。のりくんでいた男たちが、船ぞこから、ざるにいれたものを、どんどんはこびだしてきます。と、みるまにそれを海の中目がけて、ざあっとあけました。あとからあとから、はこびあげては、海へぶちまけるのです。

みていたものたちは、おもわず波うちぎわまでかけよると、さけびました。

「なぜすてるのだ。」

「もったいないことをするな。」

けんざんは、わらいながらいいました。

「よい、よい。わしが海へあけるようにいいつけたのじゃ。いま、みんなでわけてたべてしまえば、それでおしまいじゃ。海へはなせば、はまぐりは二ばいにも、三ばいにもふえる。そしてこの土佐の海では、年ごとにおいしいはまぐりがとれる。みんなも十分たべられるというものじゃ。たのしみはさきにしたほうがよいぞ。」

そして、にこにこしながらいいました。

「みやげは、まだまだあるのだぞ。」

山のみやげは？

船つきばでは、のこったけらいが、大きなはこをゆびさして、人そくにいっています。

「おい、これもごかろうさまの、だいじなみやげだぞ。気をつけてはこんでくれ。中は生きものじゃ。にが

すことのないようにな。」

「へいへい。かしこまりました。」

人そくはぺこぺこしながら、ふたりがかりで、はこをかつぐと、

「なんだ、ばかにかるいじゃないか。なにがはいってるんだろう。」

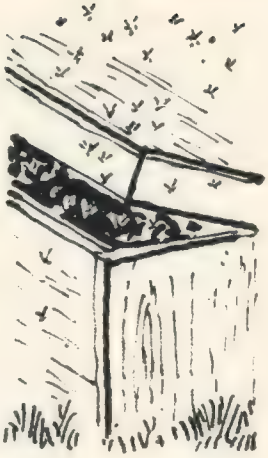
「さっきのはまぐりは、おしかったなあ。海へはなせば、そりゃふえるかはしらんが、やっぱりたべてみたかったなあ。」

しゃべりながら、原っぱへかかりました。あたりにはもうだれもいません。ふたりははこをおろすと、にやりとかおを、みあわせました。

「おい、中をちょいと、のぞいてみようではないか。」

あい手も、まっていたように、

「うまそうなものなら、おさきにひと口、いただこうではないか。なに、すこしぐらい、



わかりゃせんよ。」
ひとりが、はこのふたをほんのすこしずらしながら、
「おれがちょっぴり、つかみだしてやるからな。」
手をいれるなり、
「わあっ。」
ひっくりかえるような声をだして、しりもちをつきました。そのひょうしに、はこのふたがはずれ、うおんと、ひとかたまりのはちのむれが、くものようにとびだしました。
「たすけてくれ。」「たすけてくれえ。」
ふたりは、ころがりながら、にげまわります。
気がつくと、はこの中のはちは、一ぴきのこらず、どこかへとんでいってしまっていました。
ふたりは、はちにさされて、ぷくぷくふくれあがったおでこや、ほっぺたや、うでをなでながら、すっかり青くなりました。

どんなばつをうけるだろう。

それにしても、だいじなみやげというのがはちだとは、ごかろうさまもいたずらがすぎるというものだ。ふたりはからになったはこをかついで、しおしおあるきだしました。

けんざんの屋しきでは、ざしきにしきものがしかれ、その上に、色いろな草がいっぱいならべられています。けんざんが、あつまったけらいたちにはなしています。

「これも、めずらしいみやげのひとつじゃ。どうじゃな、土佐の山や野原に、

生えておる草もあろうかな。」

けらいたちは、あきれたように、けんざんをみあげました。

「ごかろうさま、これもやはり、たべられる草なので？」

「それでまた、

はまぐりのように……
これは山にうえるのですか。
それをふやしてたべますので？」
「はっはっは……。」
けんざんは、ゆかいそうにわらいだしました。
「これはただの草ではない。くすりになる草なのじゃ。やく草えんをつくって、そこへうえようとおもう。どの草がなんの病気にきくか、わしは江戸でおそわって、ぜんぶきろくをとってきた。うんとふやして、おおくの人たちの病気にやく立つようにしたいとおもうてな。」
けらいたちは、あらためてしげしげと、目のまえの草をながめました。
そこへ、こぶだらけのふたりが、しょんぼりあらわれました。
ふたりは、あたまをすりつけていいました。
「ごかろうさま、まことにもうしわけないことをいたしました。」

「だいじな江戸からのおみやげを、みんなにがしてしまいました。」
話をきくと、けんざんは大わらいしました。ふたりのかおをみると、気のどくそうに、
「よいわ、よいわ。あれははちははちでも、みつをあつめるみつばちなのじゃ。にげたといっても、この土佐の地のどこかで、すをつくり、みつをあつめてくれよう。みつがみんなのものになるのに、かわりはないわ。」
そして、わらいながら、
「おまえたちに、さっそく、このやく草がやくにたちそうじゃな。」
まえにおかれた草の中から、ひとつをえらぶと、
「これをよくもんで、さされたところに、つけるがよいぞ。さぞいたかったであろう。」
と、いたわりました。
けんざんが、このときもちかえった三つのみやげ、はまぐりとはちみつとやく草は、あとあとまで、土佐の人たちのくらしをゆたかにしました。

（おわり）

野中けんざんは三百年まえ、いまの高知県のかろうというやくでした。江戸からはまぐりをはこんだり、やく草やみつばちをとりいれたのは、ゆうめいですが、ほかにも、みんなのくらしをよくするため、たいへん力をいれました。のちには政治のいけんがあわず身をひきました。

やさしい心

すずめもはえも友だちだい

——はいくのめい人小林一茶——

なきべそやたろう

「やたろうやあい、子もりっ子やあい。」
「しょうべんにぬれて、めーそめそ。」
「わあい、わあい。」
村のわんぱく子たちは、やたろうをみるとからかいます。中には、石をなげつけてくる子どもいます。
やたろうのせ中では、こわがって、おとうとがなきだします。
「おお、よしよし。」
あわてて、ゆすりあげながら、やたろ

うの目は、もうなみだがいっぱいです。

「やーい、なきむしやたろう。べそかいてやーい。」

わんぱく子たちは、よけいおもしろがって、はやします。

やたろうを生んだおかあさんは、やたろうが小さいときに死にました。こん度きたおかあさんは、よくはたらくじょうぶな人ですが、いつもやたろうにいいます。

「やたろう。おまえは気がよわくてだめだ。もっとしゃんとおし。」

「赤んぼを、なかすんじゃないよ。」

「おまえがしゃんとしておもりをしないと、おっかさんたちは、安心して田んぼのしごともできないじゃないか。」

やたろうのうちは、びんぼうな百しょうです。おとうさんもおかあさんも、一日中、田んぼや畑ではたらいています。

いそがしいおかあさんは、いつも気が立ったかおをしています。だから、うちの中ででもやたろうは、いつもおどおどしていました。

だからおもりをしながら、そとであそぶときがたのしいときです。

やたろうは、わんぱく子たちからはなれて、ひとり村はずれにいきました。

石のおじぞうさんが、赤いよだれかけをして、やさしい目をし

て立っています。

「おじぞうさん、どうしてみんなは、おいらをいじめるの？おいらは、なんにもわるいことをしていないのにね。」

おじぞうさんの目は、やたろうへうなずいているようです。

「おじぞうさん、おいらの友だちになってくれるかい。」

やたろうは、そばの石にこしかけました。せ中のおとうとも、いつかねむったようです。まわりの田んぼは、なのはながさかりです。れんげもさいています。とんびが、ピーヒョロロとたかくとんでいます。

「いい天気だなあ。」

やたろうのなみだは、いつかかわいてしまいました。

七、八羽のすずめが、おじぞうさんのまわりに、とびおりてきました。

チュン、チュン、チュッチュ。

「いいなあ、すずめは友だちがあって——。あんなになかよくあそんでるんだもの。おいらには、どうしてみんながあそんでくれないんだろう。」

そのうち、すずめたちは、なににおどろいたのか、わっととびさってしまいました。

「ああ、いってしまった。」

ぼんやりみおくっていると、そのうち、一羽だけがもどってきました。石にこしかけているやたろうのまわりを、チュンチュンとびまわります。やたろうを、おじぞうさんのなかまだとおもうのか、こわがりもしません。

「どうしたの？おまえ、さっきのなかまとあそばないの？」

やたろうは、はっとしました。

「おまえも、なきべそすずめかい？めーそめそかい。」

チュンチュン。

やたろうは、体をのりだしました。そのすずめが、じぶんのような気がしていました。

おやなしすずめよってこい

あさ、おとうとをせ中にせおうと、やたろうは、いそいで村はずれにいきます。

おじぞうさんは、天気のいい日も、雨のふりそうな日も、あたたかい目で、やたろうをむかえてくれます。

すずめたちまで、もうきています。

チュンチュン、チュンチュ。

やたろうは、うちからもってきた、

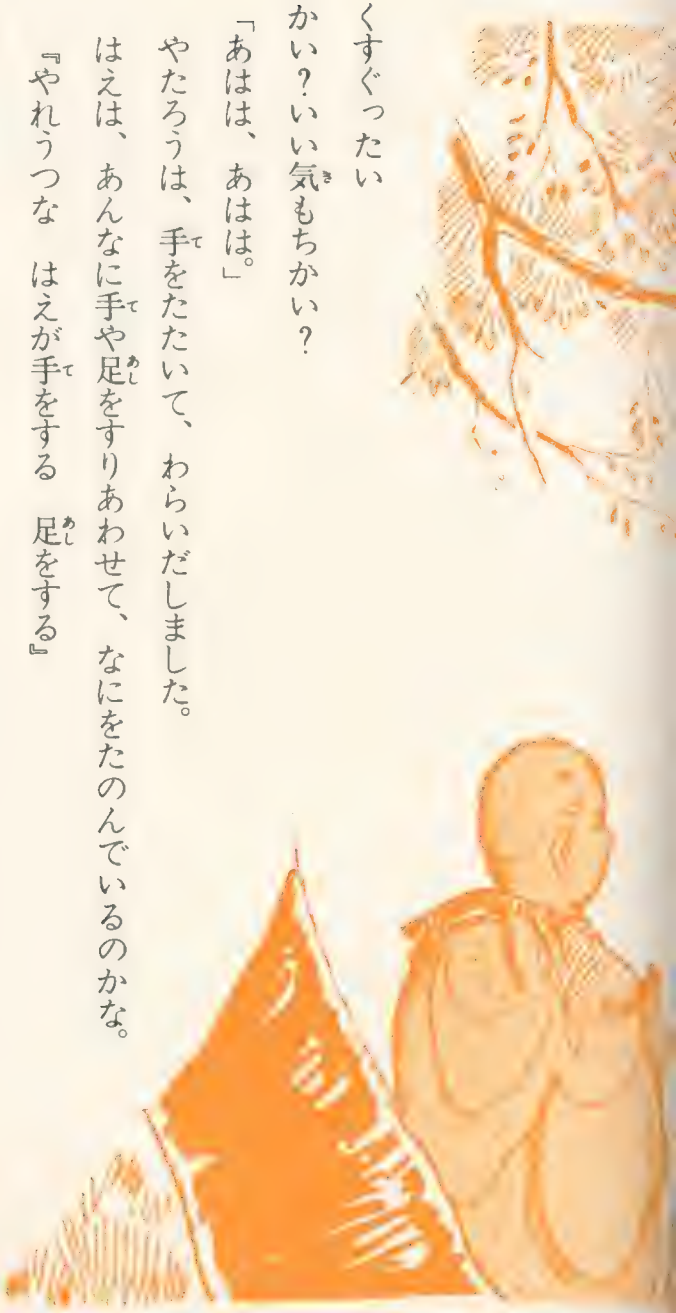
くずもみをまいてやります。
「そうら、おみやげだぞ。」
すずめたちは、大よろこび。
やたろうも、せ中のおとうとを
ゆすりあげながら、ちょうしを
とっていいます。
「よわむしすずめに、
ちびすずめ、

おやなしすず
めも、よってこ
い。あそんでやる
から、よってこい。」

『われときて　あそべや
　おやのないすずめ』
やたろうは、よわむしすずめのみかたです。
村はずれの道には、にもつをつんだ馬がやってきます。
しゃんこしゃんこ、はいどう。
ほおかぶりしたお百しょうが、いっしょです。
ぱかぱか、ぱかぱか。
「やあ、馬にふまれるぞ。」
やたろうは、気が気でありません。
『すずめの子　そこのけそこのけ
　お馬がとおる』
すずめたちは、いっぺんに、
ぱあっととび立ちました。

「ああ、よかったなあ。
おじぞうさんのあたまには、はえもあそびにやってきます。
あれれ、はえが、おじぞうさんのあたまから
はなの上までおりてきたぞ。
おじぞうさん、

くすぐったい
かい？いい気もちかい？
「あはは、あはは。」
やたろうは、手をたたいて、わらいだしました。
はえは、あんなに手や足をすりあわせて、なにをたのんでいるのかな。
『やれうつな　はえが手をする　足をする』
『ごおおん。』
お寺のかねがなりました。
気がつくと、もう日がしずみかけています。せ中は、おとうとのしょうべんで、またぐっしょりぬれています。



でも、やたろうは元気でいいました。

「さよなら、すずめ。またあした。いじめっ子がきても、おいらがついててやるからね。」

やたろうは、のちにはいくのべんきょうをして、一茶となのりました。子どものころをおもいだして、やさしい心のはいくを、たくさんつくりました。

（おわり）

やたろうは、十四才のとき江戸にでて、はいくのべんきょうをしました。なまえも、一茶とかえました。

『われときてあそべやおやのないすずめ』

『やせがえるまけるな一茶ここにあり』

など二万もはいくをつくりました。年とってから、つまや子に死なれ不幸でしたが、それにまけず、やさしいつよい心ではいくをつくりつづけました。

動物ずきなウオルト

カンザス（アメリカ中部の州）のうじょうの、ジョンじいさんが、大きな声でよんでいます。

「ウオルト、ウオルト。はて、どこへいったのかな。」

そしてもう一度、大きな声でよびました。

「ウオルトやあい。」

つみあげたかれ草のむこうから、男の子がとびだしてきました。

「ジョンじいさん、なあに。ぼく、ここにいるよ。」
「やあ、おかあさんが心配していたよ。
いつまでもかえってこない
ってさ。わしは、
どうせカンザス
のうじょうで、
ひつじややぎと、
あそんでるんじゃ
ろうと、いってお
いたがね。ははははは。」
「そうだよ。ぼくね、
やぎのえをかいていたんだ。
ほら、ぼくのかいたのをみてよ。

やぎって、おなじかおしたのは、一ぴきもい
ないんだね。のんびりしたのや、気のつよいのや、
すばしっこいのや、やることだって、みんなちがうんだよ。」
ジョンじいさんは、ウオルトがさしだしたえをみると、おもわず、
「うーん、ウオルト、よくかけてるなあ。ふふふ、こいつはどうじゃ。
まるでわしそっくりのひげをしとる。おいぼれじゃな。」
「ちがうよ。それはおちついた、ちえのあるやぎだよ。ほら、あすこで草をたべているやつだよ。ぼく、もっとかいてくるから、おかあさんにいっといて。夕がたまで、かえらないからって。」
ウオルトは、またかけもどっていきます。
「わかったぞ、ウオルト。」
ジョンじいさんは、たのしそうに、そのうしろすがたをみおくりました。
「しかし、あんなに動物のすきな子もめずらしいな。それに、動物のうごきを

なかなかよくつかんで、かいているわい。」

屋根うらのねずみたち

ウオルト・ディズニーは、はたちになると、友だち五、六人といっしょに、まんがえいがのしごとをはじめました。せまい屋根うらの部屋をかりてまんがをかき、それをえいが会社へうりこむのです。

しかし、かいてもかいても、えいが会社ではかってくれません。

「いまにみてろ。ぼくたちのすばらしいまんがえいがで、世界中をあっといわせてみせるからな。」

「そうだとも。おれたちのえがわからないなんて、いまにこうかいするぞ。」

しかし、お金がはいらないので、みんなのくらしは、くるしくなるばかりです。パンと水だけのしょくじも、しょっちゅうです。

そのまずしい部屋へ、ねずみたちは、こぼれたパンくずをたべに、ちょろちょろかおをだします。

「こら、またきたぞ。こんなびんぼうずまいへ、なにをしにくるのだ。」

みんなはみつけると、ものをなげつけて、おいはらおうとします。

「よせよ。」

ウオルトは、それをとめると、のこしておいたパンくずを、ねずみにまいてやります。そしてたのしそうに、ねずみのようすをみています。

「かわってるね。ウオルトきみは。」

しかし、ウオルトたちは、部屋だいがはらえなくなって、いよいよあと二、三日で、屋根うらの部屋をでなければならなくなりました。

「またあたらしく、でなおしだ。しかたがない。」

なかまたちは、あとかたづけをして、ひとりふたりとかえっていきます。

「ウオルト、きみもはやくかえれよ。体をこわすぞ。」

まい日、夜ふけまでのこっているウオルトへ、声をかけていきます。

ウオルトは、ひとりでぼんやりかんがえていました。もうなんかいも、こうしてしっぱいばかりかさねているのです。じぶんたちのまんがえいがが、はたしてみんなによろこばれる日が、くるのだろうか。かんがえだすと、心がしずむばかりです。

部屋のストーブは、とっくにきえています。さむさは、足からはいあがって、ぞくぞくせ中までしみます。おなかもすききっています。

ねずみたちは、ウオルトひとりだとみると、三びきも四ひきも、ゆかを走りまわっています。そのうち一ぴきは、ウオルトのつくえの上までかけあがってきました。ウオルトがかおをあげると、ひげをぴくぴくさせ、うしろ足で立ちあがって、ウオルトをみました。

「やあ、おわかれをいいにきてくれたのかい。」
ウオルトは、おもわずにっこりしました。
そしてすぐ、はっとしました。
そのねずみが、いかにも人間らしくうなずいたように、おもわれたからです。えんぴつをにぎりしめて、夢中で、

そのねずみのスケッチをはじめました。ゆかを走りまわるねずみ。小さい目をすばやくうごかしているねずみ。ウオルトは夜のふけるのもわすれて、かきつづけました。

つぎの日、なかまたちは、ウオルトのたくさんのねずみのえをみて、びっくりしました。

「きみのねずみのえは、かわってるね。人間みたいなとこがあるじゃないか。こんなにねずみがすきだとは、しらなかったよ。」

ウオルトは、屋根うらの部屋をでてからも、かごにいれてねずみをかい、いつもじぶんのそばにおいていました。

ハリウッドにはいったウオルト・ディズニーがさいしょにつくったのは、ねずみのまんがえいがです。世界の子どもたちに大よろこびされた、ミッキーマウスでした。

「やあ、やっとぼくのえいがをつくってくれましたね。」

あのときのねずみが、いっているような気がしました。

（おわり）

※ ディズニーは、ミッキーマウスが大ひょうばんになったあとも、白雪ひめ、ピノキオ、バンビなど、世界中の子どもを大よろこびさせる、すばらしいマンガえいがをかきつづけました。

きょうだい愛のひかり

雪げしきのえ

——えかきで学者の渡辺華山——

夜中のはなし声

のぼるは、夜中に、はなし声で目がさめました。

となりの部屋で、おとうさんとおかあさんが、ひそひそはなしています。

「では、どうしても、あの子はお寺へ子ぞうにやるのですね。」

おかあさんの声が、ないているようです。

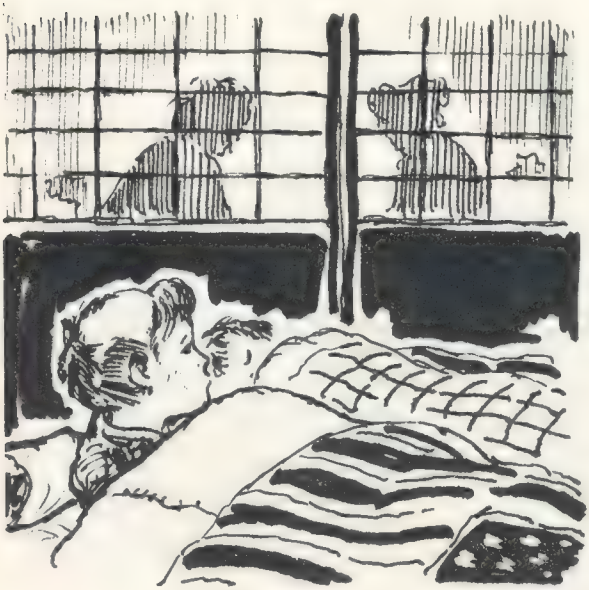
すこしたって、おとうさんのひくい声がいいます。

「いたしかたあるまい。わしは、このとおり体がよわくて、おやくも、まんぞくにはつとめられぬ。そなたがいくらせいだして、ないしょくをしてくれても、とてもおいつかぬ。寺へいけば、学もんもできよう。せっかく、むこうからいってくれることではあり、それがあの子のためになるとおもう。」

おとうさんの声も、うるんでいるようです。

のぼるは、むねをつかれました。

のぼるのうちは、びんぼうなさむらいです。おとうとが三人、いもうとがふたりと、子どもがおおい上、おとうさんが病気がちなので、よけいせいかつがくるしいのです。このあいだから、おとうとを、とおいひたちの国（いまの茨城県）のお寺へ、子ぞうにだす話がおきていました。おとうとは、まだやっと六才です。



よこをみると、そのおとうとは、なにもしらずすやすやねています。なんの夢をみているのでしょうか。赤いほっぺたに、うれしそうなえくぼをへこませて、にっこりしました。

のぼるは、たまらなくなって、おきていきました。

「おとうさん、おかあさん。わたしが一生けんめいはたらきます。おとうとを子ぞうにやるのは、もうすこしまってください。」

おとうさんもおかあさんも、な

みだをため
て、うなず
くばかりです。
「なにもすすんで、
子ぞうにやるわけではない。」
のぼるは、小さいおとうとやいもうと
のおもりをしながら、そのあいまに、きんじょのおつか
いをします。おかあさんは、まえよりよけいに、ないしょくのしたてものをしました。
しかし、いくらはたらいても、とてもいもうとやおとうとに、おなかいっぱいたべさせ
ることはできません。
それにおとうさんは、じぶんのたべものを、子どもたちにたべさせようとするので、体
がよわっていくばかりです。
のぼるは、けっ心しました。

（わたしがはやくおとなになり、えらくなって、おとうとをよびかえそう。それまでがまんするのだ。わたしよりも、おとうさんやおかあさんのほうが、どんなにつらいかしれないのだ。よわい心にまけていてはならないのだ。）

雪の日のわかれ

いもうとは、しんせきのうちへもらわれていきました。

そしておとうとも、とおいお寺へいく日がきました。あさから雪がふりしきる

日でした。

むかえにきたのは、がんじょうそうな男です。

おとうとは、おかあさんから、かっぱをきせてもらいました。おかあさんは、その足に、きゃはん（あるくときスネにまいて、あるきやすくするもの）をはかせて、わらじのひもをむすんでやりながら、なみだをこぼしています。

「はやくしてくれんかね。この雪じゃ、いそがないと、日ぐれまでにむこうへつかないからね。」

男はせき立てます。

「体をだいじにするんですよ。おししょうさんのいうことをよくきいて、べんきょうするんですよ。」

おかあさんは、むりにえがおで、はげます。

のぼるは、おとうとの手をしっかりにぎりました。

「さ、にいさんがと中まで、おくってあげるよ。」

雪をふみしめて、あるきだしました。

病気のおとうさんがおきだしてきて、戸口から、そっとみおくっているのを、のぼるはしっています。

小さいおとうとの足は、ともするとおくれがちになります。

そのたびに、男はふりむいてせき立てます。

「ぐずぐずしないで、はやくあるかないか。むこうへつくまでに、日がくれるぞ。」

そして、のぼるに、

「おまえさんが、いつまでもおくってくると、この子の気もちもにぶるだろう。もうこの

へんで、かえってくれないか。それにどうせ一度は、わかれなければならないんだからね。」

のぼるは、立ちどまりました。

おとうとのすげがさにも、かっぱにも、雪がしきりにふりかかります。おとうとは、男に手をとられ、ふりむきふりむき、とおざかっていきます。小さい足が、雪につまずいてころびそうになります。男がぐいとひきおこしました。

雪は、まるでそのおとうとのすがたをけそうとするように、つよくなっていきます。

のぼるは、はをくいしばってみおくっています。足はおもわず、おとうとのあとをおいそうになります。目はなみだでいっぱいでした。

家も道も、白ひと色にしてふりつづく雪。その中を、なきだしそうにふりむいていったおとうとのすがたは、のぼるのむねにつよくやきつきました。

わたしは、べんきょうして、りっぱな学者になろう。それが、おとうとをよびかえす、ちか道にもなるのだ。のぼるは、あたらしくけっ心しました。

しかし、学者になるためには、えらい先生につかねばなりません。そのためにも、お金

がいります。

のぼるは、えをかきだしました。小さいときからえがすきで、先生についてべんきょうしたこともあります。そのえをかってもらって、学もんをするのです。

のぼるがかいた雪げしきのえを、みんなは、

「みごとな雪げしきだ。」

「心をうつえだ。」

と、ほしがります。

その雪げしきの中から、おとうとの声がきこえてきます。

にいさん、がんばって！

おまえも、がんばるんだぞ。

のぼるは、おとう

とへの気もち
をこめて、雪
の日のえを、
かきつづけ
ました。
（おわり）

❀ のぼるは、渡辺華山のことです。のちに江戸づめのかろうというやくにつきました。外国の学もんもよくべんきょうし、すすんだかんがえももっていたので、それがばくふのかんがえとあわず、とらえられました。とのさまになんぎがかかるのを、心配してじさつしました。えかきとしてもゆうめいです。

人るい愛にもえて

ジャングルに ひびくかね

——黒人の父シュバイツァー博士——

いのちをだいじに

「おいみんな。あそこにカメが、ひるねしているだろう。」

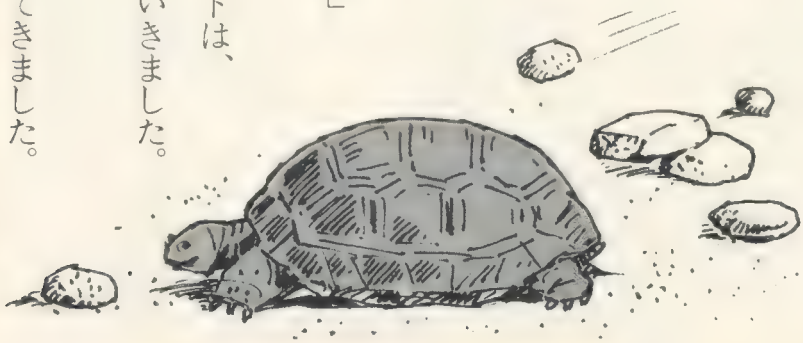
いけのまわりにあつまって、子どもたちがさわいでいます。大きな声でいっているのは、ハインリッヒです。

「カメのせ中に、うまく石があてられるかい？カメがこうらをわられたら、どうなるかためしてみないか。」

「ようし、ぼくがあててやるぞ。」

「ぼくのほうが、うまいよ。」

われもわれもと石をなげます。でもうまくあたりません。
「やあ、アルベルトがきたぞ。アルベルトならあてられるよ。石なげがうまいんだから。やってみろよアルベルト。」
アルベルトとよばれた男の子は、にこにこしながらそばへきました。話をきくと、まゆをよせて、
「なんにもしないカメをいじめるなんて、ぼくはいやだよ。かわいそうだもの。みんなもよせよ。」
「なんだ、ゆうとう生ぶって、よし、そんならぼくがあててやる。」
ハインリッヒは、いきおいこんで石をひろいました。
いまにも石をなげようとしたハインリッヒのうでを、アルベルトは、ぐいとひっぱりました。石はそれて、とんでもないほうへとんでいきました。
「こいつ、よくもじゃまをしたな。」
ハインリッヒはまっ赤になって、アルベルトに、なぐりかかってきました。



アルベルトは、右や左にかおをよけましたが、なぐられるままです。ぼうしもふっとびました。

「おい、なにをしている。手むかいもしないものをなぐるなんて、ひきょうじゃないか。」

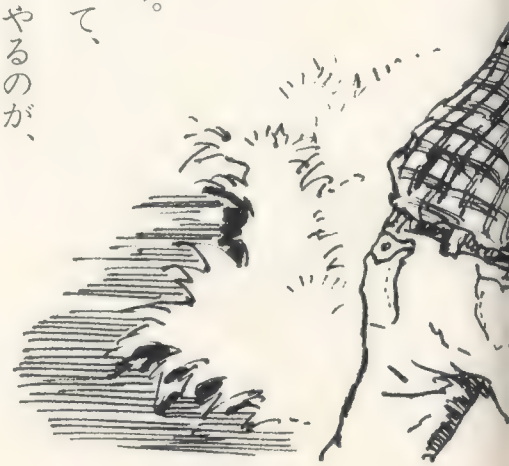
とおりかかったのは、ぼくしさんでした。

わっと子どもたちは、にげていきます。

「けがはなかったかい？アルベルト。ずい分ぶたれていたが、どうしたんだね。」
「なんでもありません。」
アルベルトは、あわててぼうしをひろうと、みんなのあとをおいました。ぶたれたほおが、ぴりぴりいたみます。
（でもよかったな。カメに石なんかなげなくて。カメだって、ひるねをたのしんでいるんだもの。だいじにしてかばってやるのが、ほんとなんだ。ぼくたち人間のいのちだって、カメのいのちだって、おなじだもの。）

ジャングルの病いん

アルベルトのその気もちは、おとなになるほど、つよくなっていきました。
アルベルトは、いしゃになりました。アルベルト・シュバイツァー博士です。



あるとき、博士は、アフリカをりょこうしました。そこで黒人たちが、はやりやまいで、つぎつぎに死んでいくのをみました。父おやにすがりついてないている子ども、かみをふりみだして、子どもをだきしめている母おや。それは、はやく手あてをすれば、なおる病気だったのです。

シュバイツァー博士は、そのようすをみて、つよいかなしみで、心がくらくなりました。

（よし、じぶんはジャングルにすもう。そして黒人たちのいしゃになろう。）

と、かたいけっ心をしました。

ジャングルは夜になると、ライオンやひょうのほえる声がします。川には大きなワニがすんでいます。そのジャングルの中に、木をきりたおして、病いんをたてるだけでも、たいへんなしごとでした。

あさ、すんだかねの音がひびきます。

すると、あちらからも、こちらからも、はだしの黒人たちが、

あつまってきます。つえをつき足をひきずっている男。しゃがみこんで、おなかをおさえている女。体中ひふ病の小さな女の子を、おろおろしながらだいた母おやもいます。みんな、シュバイツァー博士のしんさつをうけにきた黒人たちです。

「どうだね。すこしは、かげんがよくなったかね。」

博士は、ひとりひとりにはなしかけながら、ていねいにしんさつしていきます。

ひふ病の女の子のばんになりました。女の子は、大きい声もだせず、ひいひいとないています。しなびたかおに、目ばかりぎょろぎょろさせています。

博士はまゆをよせました。

「どうしてこんなにひどくなるまで、ほうっておいたのかね。このままだと、死んでしまうところだったぞ。」

博士は、すぐ助手にめいれいして、女の子を、くすりのふろにいれました。

「またあしたも、つれてきなさい。まい日、くすりのふろにいれるからね。」

そして、

「えいようのあるものを、たべさせなければいけないよ。」

と、バターや、かんづめをもたせました。

母おやは、地めんにあたまをすりつけるほど、おじぎをくりかえして、かえっていきました。

しんさつがすむと、助手たちは、博士をとりかこんでいいました。

「あの女の子は、ほんとになおるんですか博士。」

「あんなにひどくなるまで、ほうっておくなんて、黒人は子どもがかわいくないんでしょうか。」

「黒人たちは、いくらいってもわかりませんよ博士。きず口がよごれるから、はだしでくるなといって、くつをわたしても、それを手にもって、へい気ではだしでくるんです。くつがよごれるというんです。」

「そうです。おなかをわるくした子どもに、かたいものをたべさせるのです。そして、なおらない、なおらないというのです。」

「わたしたちは、ジャングルの中へきて、くるしいおもいをしながら、むだなほねおりを、しているんじゃないのでしょうか。」

博士は、だまってきいています。力のこもったあたたかい目で、助手たちをみまわしました。

「黒人たちのジャングルのせいかつは、なにもしらないことばかりだ。だがそれは、黒人たちのせいではないのだ。」

博士は立ちあがると、テーブルの上の水さしの水を、ふいに地めんにぶちまけました。

助手たちは、おどろいて立ちあがりました。

た。

ジャングルの中には、大きなアリがはいまわっています。アリたちは水におぼれて大さわぎです。

「これは人間とおなじなのだ。きみたちは、みすみす死なせられるかね。」

博士は、やしのはを水の上におきました。アリは大いそぎではいあがります。

「わたしたちのしていることは、これとおなじだ。黒人でも白人でも、人間のいのちには、すこしもかわりはない。かれらをすくうのはわたしのつとめだ。」

博士は、つよいちょうしでいいました。

かねの音にいのる

一週間もすると、女の子は、博士や助手たちのけんめいな手あてで、みちがえるほど元

気になりました。
博士をみると、
にこにこわらいます。
「おお、よしよし、
元気になったな。」
博士もうれしそうです。
女の子の父おやは、
やしのはであんだ、ぼうしをさしだしました。白いはをむきだして、おじぎをくりかえしながら、
「おれいのしるしです。これかぶると

あつくない。」と、いいます。

博士はにこにこして、それをかぶってみせました。

助手たちも、たのしそうにわらってみています。

博士はしんさつのあいまに、黒人たちに、神さまの話をします。なかよくくらすことのたいせつさや、体のしくみの話もしました。黒人たちは、博士をおとうさんとよびました。

夕ぐれになると、ジャングルの中に、またかねの音がひびきます。博士はあたまをたれて、そのかねにいのります。白人黒人のべつなく、世界中にへいわとしあわせが、きますように。力いっぱい、そのためにはたらけますようにと——。

かねは、博士のねがいのままに、ジャングルのおくふかくまで、ひびいていきました。

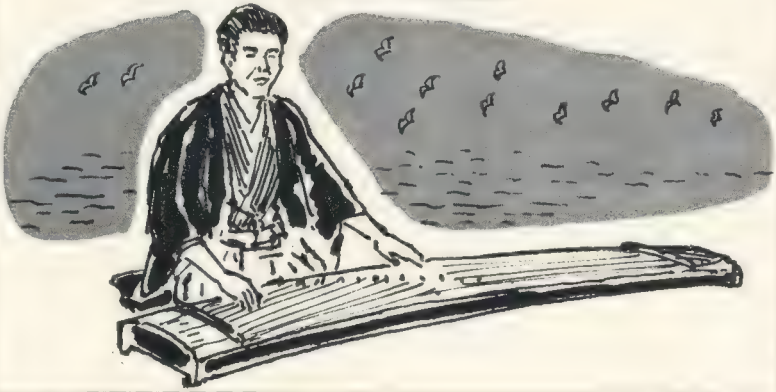
（おわり）

※　アルベルト・シュバイツァーは、ドイツのライン川のほとりの、小さな村で生まれました。三十六才のとき、黒人のいしゃになるために、おくさんといっしょにジャングルにはいったのです。小さいときからピアノをならっていて、音がく家としても、ゆうめいです。一九五三年にはノーベルへいわしょうをもらいました。死ぬまでジャングルをはなれず、黒人のためにつくしたので、みんなから『みつりんのせいじゃ』とよばれました。

心がわかる音がく

心でひくことの音

——ことのめい人宮城道雄——



みえなくなっていく目

「あっ、あぶない。」

ドアにぶつかりそうになった道雄を、おばあさんが、あわててささえてくれました。

「気をつけないと、いけないよ。」

道雄は、おばあさんにしっかりつかまりながら、不安そうに目をむけました。

「ぼくの目、ほんとにみえるようになるの？おばあさん。」

「なりますとも。だいじょうぶだよ。」

おばあさんは、力をこめていいます。
「心配しなくても、きっとなおしてあげるよ。」
おとうさんもいいます。
道雄のおかあさんは、小さいとき死にました。
道雄には、じぶんの目が、だんだんわるくなっていく気がします。まえには、ドアにぶつかるなんてことは、ありませんでした。
(このあいだ、うらないさんがいったことは、ほんとだろうか。)
道雄の目がなかなかなおらないので、おばあさんは心配のあまり、道雄をうらないをする人のところへ、つれていったのです。
「この子の目は、なおるでしょうか。どうしても、なおしてやりたいのです。」
うらないをするおじいさんは、道雄のかおを、ながいことじっとみていました。そして、
「病気のことは、わかりません。しかし、もし目がみえなければ、このお子さんは、世にもすぐれた人になられるでしょう。」

と、いいました。

うちへかえると道雄は、

「ぼく、すぐれた人にならなくてもいい。目がみえるようになりたいよ。おばあさん。」

「そうだとも、そうだとも。」

おばあさんは、道雄をしっかりだきしめてくれました。

「きっと、目はなおしてあげるからね。」

道雄は、そっと耳をすませます。
となりの家から、やさしいことの音が
きこえてくるのです。
チン、トン、シャン。コロリン、シャン。
その音をきくと、道雄はじぶんの心に、
ぽっとあかりがともるような気がしました。
「いい音だね、おばあさん。」
いつか、熱心に耳をかたむけています。
「あっ、まちがった。」
道雄がいうと、おばあさんはわらって、
「まさか。おことをひいているのは、もう
十年もおけいこしている、おじょうさんです
よ。おまえのほうが、まちがってきいたのですよ。」

でも、ことはまたもとへもどって、ひきなおしています。

コロリン、チン、トン。

「ほうら、ね、おばあさん。」

おばあさんは、びっくりして道雄をみています。

九才になったとき、道雄の目は、すっかりみえなくなりました。

おとうさんや、おばあさんの力おとしは、もちろんです。

そんな中で、道雄はいいました。

「おとうさん、

ぼく、ことをならいたい。」

コロリン、シャン。

やさしいことの音が、じぶんをよんでいる気がしました。

夜ふけのおしえ

ぼうえきのしごとをしていたおとうさんは、道雄のためには、どんなことでもしてやるつもりでした。

中島けんぎょうという、ゆうめいなことの先生に、でしいりさせてくれました。

道雄は、おばあさんに手をひかれて、先生のうちへ熱心にかよいます。

中島けんぎょうは、めい人だけあって、けいこにはきびしい先生でした。道雄にもいいました。

「わたしがひくことの音を、よくきいていなさい。一度きいたら、わすれないかくごでくのです。わたしは、二度とおなじ曲はひかないからね。」

そして、つづけていいました。

「この道で、身を立てようとするのなら、しんけんな気もちで、べんきょうしなければ、とても一人まえにはなれないよ。」

中島けんぎょうのうちからかえると、道雄はすぐおさらいをします。先生がひいた曲を、なん度もくりかえし、くりかえしひくのです。おなじようにひきながら、道雄には、先生のようなうつくしい音が、どうしてもだせません。おぼえてきた曲を、まちがわないようにひくのが、せいいっぱいでした。

先生は、どうしてあんなにうつくしい音がだせるのだろう。

道雄は、ことをひくことに、夢中になっていきました。

ある日のことです。

いつものように、その日おそわった曲をひきはじめました。千鳥の曲です。

ところが、あるところまでくると、道雄の手は、はたととまってしまいます。なん度もなん度もくりかえします。どうしてもさきにすすめません。

ああ、どうしてわからないのだろう。あんなに一生けんめいきいてきたのに。あせればあせるほど、わからなくなっていきます。

ぼくは、だめな人間なのだろうか。

ことをひくねうちは、ないのだろうか。

しまいには、ひきながらなみだがあふれてきます。

おばあさんが、心配して、

「道雄、そんな

におもいつめては、どくだよ。
わからないのなら、あした
先生にうかがってごらん。
いくらじぶんでかんが
えても、わからない
ものは、むり
ですよ。」
「いいえ、
ぼく、先生
にやくそく
したのです。
先生は、二度と
おなじ曲はひかない

とおっしゃったのです。どうしても、ひけるようにならなければ。」

夜がふけても、道雄はことからはなれません。

とうとう、おばあさんがたまりかねて、いいました。

「それじゃ、これからいって、先生にうかがってみようね。おばあさんが、よくおねがいしてあげます。」

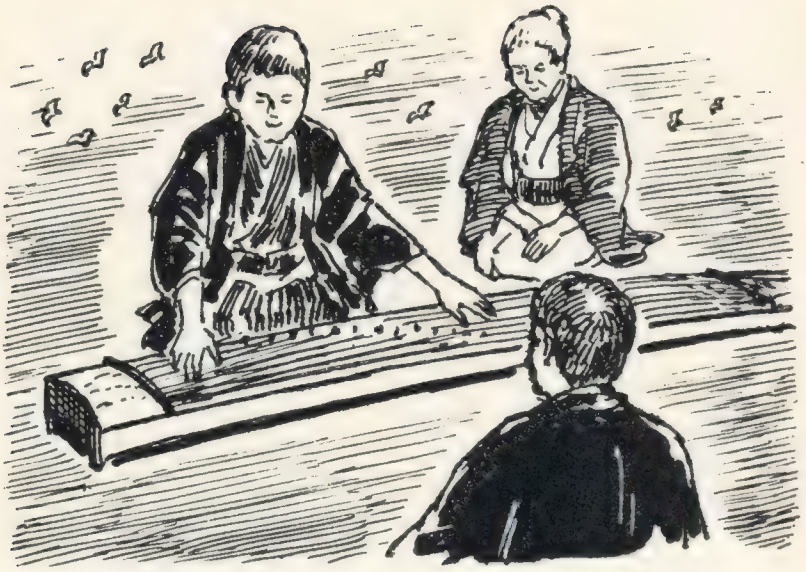
おばあさんは、道雄をつれて、ねしずまった町へでました。

道雄とおばあさんの、げたの音だけがひびきます。

けんぎょうは、もうねていらっしゃるにちがいない。きっとしかられるだろう。でも、おしえていただくまでは、うちへかえれないのだ。と道雄はおもいました。

けんぎょうは、道雄とおばあさんの話をきくと、にっこりしました。

「よくそこまで、一生けんめいになったね。わからなくなったのは、曲を手さきや、音からだけで、おぼえようとするからだ。いいかね、これは千鳥がとんでいるところを、曲に



したものだろう。よくききなさい。」

けんぎょうは、ゆっくりひきはじめます。

「しずかにとんでいる千鳥。にぎやかにとびかう千鳥、波をかすめてとぶようす……。」

道雄は、みえない目をすえて、くいいるようにきいています。いつかじぶんが千鳥になって、波にたわむれているようなたのしい気もちになっていきました。

ことの音は、たかくなりひくくなり、道雄の体中にひびきます。けんぎょうのうたう声は、道雄の心いっぱいにひろがります。

曲がおわったとき、道雄のほおはかがやいていました。

「先生、よくわかりました。ありがとうございます。」

手をついていいました。

「おばあさん、ぼく、おことのすばらしさがよくわかったよ。もっともっとべんきょうするよ。」

道雄は、じぶんの目がみえないことをわすれていました。目のまえが、海のように大きくひろがった気もちでした。

「その曲をつくった人の気もちになって、ひかなければ、ほんとうのことはひけないのだ。」

道雄は、けんぎょうのことばを、じっと心にきざみ、わすれませんでした。（おわり）

❀宮城道雄は、おことだけでなく音がくなら、なんでもすきでした。日本の音がくのほか、レコードなどで外国の音がくのべんきょうもしました。そして日本音がくに外国の音がくをとりいれた、あたらしい日本音がくをたくさんつくりました。『春の海』『あめのへいたい』『おちばのおどり』『さくらへんそう曲』など、ゆうめいです。

◆三年生の学級文庫⑫「三年生の美しい話心をうつ話」

〈解説〉ご両親や先生がたへ

読後の子どもの質問や話しあいを大切に

学習院初等科教諭
土田　治男

読書意欲の出はじめる時　小学校の中学年は、学校生活になれ、友だちがきまり、のびのびとまことに活動的になっていく学年です。読書の面も同様で、みたりきくよろこび（テレビの視聴をよろこぶこともふくめて）から、進んで、自分からおもしろそうな本を読む意欲が旺盛になる時です。

学校図書館でも、読書導入の好機とかんがえ、貸だしをはじめたり、読書カード記入をすすめたりしているところがおおいのです。

ここにあげた十四の美しい話、心をうつ話は、ごく短かい話なので、読みの力の弱い子でも、読みきったよろこびをじゅうぶんに経験します。そのうえ、美しい話のひとつひとつがよくわかって、すばらしいことだと心をうたれるとおもいます。そして、もっとこの人のほかの話を

しりたい、調べてみたいという希望もでてくるでしょう。

指導のひとつ（なかまさがし） にている話をさがさせてみるのも、よい指導でしょう。

『はたらく人をだいじに』（徳川光圀）と『三つのみやげ』（野中兼山）は、とのさまや、かろうというくにの政治をする人が、自分のりょう地の人びとのしあわせをかんがえた話。

『おかあさん死なないで』（フォード）や『きちがいきざえもん』（柿えもん）『ねずみをまんがに』（ディズニー）『心でひくことの音』（宮城道雄）は、研究熱心なようすを書いています。『ねずみをまんがに』は『雪げしきのえ』（渡辺華山）と『心でひくことの音』とおなじなかまで、芸術のために大へん苦心したお話になるでしょう。

『日本のお人ぎょう』（津田梅子）をたいせつにしたお話や、女王さまが電話にでて国民と話しあわれる（オランダ・ユリアナ女王）の話と、『レオがあげたのは』（トルストイ）のお話。『すずめもはえも友だちだい』（小林一茶）は、「心」のもんだいをのべています。

『むす子のうでにほうそうを』（ジェンナー）と『ジャングルにひびくかね』（シュバイツァー）は、世界の人を愛するやさしい心の話です。

読後の子どもの質問や話しあいを大切に　ひとつかふたつのいつ話が書かれていますが、伝記ですので、人名、地名や、むずかしいことばがでてきます。註をいくつかいれてありますが、お子さまには、まだほかにわからないところがありましょう。話の内容は、とばし読みでもわ

かりますが、「意味」のわかりにくいところにしるし（——）をして、先生や親に質問したり、自分で調べたりする、もっと深い読書に発展したら、すばらしいことだとかんがえます。

『マカルーの日しょうき』について　ニュースにも、心をうつ話がたくさんでてきます。この登山隊の話は、ごく最近（昭和四十五年〜四十六年）の話です。

五年間も準備し、二十人が力をあわせて、高いヒマラヤの山に登ったのです。登りはじめたら天気がわるく、テントや食料の荷物はこびから苦労の連続でした。無線のこしょうなどで、連絡がとれなくなり、そうなんしたと心配された隊員もいました。

ようやっと隊員の中のふたりが、頂上につきました。しょうこの写真をとろうとしたら、写真機がこおりついて、シャッターがおりません。日しょうきだけたてて、山をおりました。けわしい山ですから、また写真をとりに頂上にはいけず残念がって日本に帰ってきました。つぎの年に、フランスの登山隊がマカルーに登りました。頂上についたら、日しょうきが雪に半分うずまっていたというのです。頂上にあったはたを写真にとって日本に送ってくれました。そして、フランス隊よりさきに日本が登っていたと証明してくれたのです。友情の登山隊と説明したのは、こういうわけからです。

ニュースからも、美しい話を読みとり、心の美しい、心の豊かな子どもになってほしいとねがっています。

昭和五十年一月

三年生の学級文庫＊12
美しい話心をうつ話
昭和50年3 初版第1刷発行

文　松井 英子
絵　伊藤 悌夫
発行者　陶山 巌
印刷所　図書印刷株式会社
発行所　株式会社 集英社
東京都千代田区一ツ橋2の5の10 〒101
電話265・6111

定価はカバーに表示してあります。
落丁・乱丁本はおとりかえします。

N.D.C 909 1975 192P 23cm
© 1975 Printed in Japan 8337－247012－3041

楽しく読んでいるうちに自然に情操を高め、考える力がつく、三年生向けに初めて編まれた画期的なシリーズ！

三年生の学級文庫

★全20巻

めざましく成長する三年生のためにぜひ読んでおきたい世界の名作や教科の要点を、学校指導要領にそって編集したユニークなシリーズです。美しいさし絵も豊富に入れて読みやすくまとめました。

全20巻の内容

① 三年生の **冒険ものがたり**
「密林の王者ターザン」「黒人王のくびかざり」など、胸おどる冒険物語3編を収録。

② 三年生の **アンデルセン童話**
「ちょうちょのおよめさん」「パラダイスの園」「マッチうりの少女」など11編。フランスの話、ポーランドの話、日本の話など、ユーモアあふれる11編を収録。

③ 三年生の **ユーモア物語**
「おかあさんの目玉」「バラの花と怪じゅう」など、人々に親しまれてきた伝説10編。

④ 三年生の **民話とでんせつ**
「しあわせな王子」「アルプスの少女」など美しい感動をよびおこす4編を収録。

⑤ 三年生の **世界名作(1)**
「ドリトル先生航海記」「家なき少女」など笑いと涙をさそう世界の名作4編を収録。

⑥ 三年生の **世界名作(2)**
知らないうちに理科の力がグングン身につく、ゆかいに勉強できる必読の副読本。

⑦ 三年生の **なぜなぜ理科**
「植物怪じゅうのしゅうげき」など、興味つきない空想科学小説の傑作4編を収録。

⑧ 三年生の **S・Fものがたり**
「勝海舟」「ナイチンゲール」など、勇気と信念にみちた世界の偉人たちの伝記8編。

⑨ 三年生の **伝記ものがたり**
学習単元にあわせわかりやすくまとめてあるので、おさらいにピッタリの副読本。

⑩ 三年生の **かんがえる算数**
「ダイヤモンドの谷」「大がめのおよめさん」など、夢いっぱいの物語10編を収録。

⑪ 三年生の **アラビアンナイト**
「ヒマラヤにひるがえる日の丸」など、いつまでも心に残る美しい名作の数々。

⑫ 三年生の **美しい話・心をうつ話**
身近な疑問にわかりやすく答え、社会に対する正しい知識を与えてくれる副読本。

⑬ 三年生の **たのしい社会**

⑭ 三年生の **日本名作**

昔から人々に語りつがれてきた日本の古典の中から代表的な名作数編を収録。

⑮ 三年生の **世界のなぞとふしぎ**

大昔から現代にいたるまで、世界中にあるなぞとふしぎの物語をあつめました。

⑯ 三年生の **クイズとパズル**

頭の回転をよくし、カンと思考力をきたえる楽しいクイズやパズルがいっぱい。

⑰ 三年生の **動物ものがたり**

心あたたまるけなげな動物たちの姿、世界の動物物語の中から名作数編を収録。

⑱ 三年生の **日本れきし物語**

「やまたのおろち」「聖徳太子」「補正成」など、日本の歴史に残る物語13編を収録。

⑲ 三年生の **探検と発見物語**

どんな困難にも負けず勇気と知恵をもって挑戦していった人々の真実の記録。

⑳ 三年生の **たのしい国語**

書き方、読み方、ことばなど、正しい国語がわかりやすく学べる便利な副読本。

一年生のために編まれた初めての全集！

一年生の学級文庫

二年生のために編まれた初めての全集！

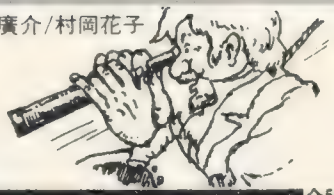
二年生の学級文庫

学校の勉強に役だつ教科のお話や世界中の名作が、美しいさし絵入りでたのしく読める新シリーズ！監修・巻立ては一年生、二年生ともに同じです。

子どもたちの心に豊かな夢と想像力をつちかう世界の名作を、美しいさし絵入りで読みやすく編集した決定版！

母と子の名作文学

★全50巻 〈監修〉川端康成/浜田廣介/村岡花子



小学2年生～4年生むき　全50巻の内容

① 若草物語　オルコット
② たから島　スチーブンソン
③ ひみつの花園　バーネット
④ 王子とこじき　マーク・トウェイン
⑤ 愛の一家　ザッパー
⑥ 海底二万里　ベルヌ
⑦ アルプスの少女　スピリ
⑧ 赤毛のアン　モンゴメリ
⑨ エミールと三人のふたご　ケストナー
⑩ トム・ソーヤの冒険　マーク・トウェイン
⑪ ニルスのふしぎな旅　ラーゲルレーフ
⑫ 足ながおじさん　ウェブスター
⑬ つるの恩がえし　おとぎぞうし

⑭ 家なき子　マロ
⑮ ガリバーの冒険　スウィフト
⑯ あらしの中の兄妹　エッシェンバッハ
⑰ 母をたずねて　アミーチス
⑱ シートン動物記　シートン
⑲ 海さち山さち　古事記物語
⑳ フランダースの犬　ラメー
㉑ アンクル・トム物語　ストウ夫人
㉒ ロビンフッドの冒険　パイル
㉓ かぐや姫　竹取物語
㉔ イワンのばか　トルストイ
㉕ ああ無情　ユーゴー
㉖ バンビ　ザルテン

㉗ 聖書ものがたり　古典
㉘ 雪の女王　アンデルセン
㉙ やじさんきたさん　十返舎一九
㉚ みつばちマーヤ　ボンゼルス
㉛ 家なき少女　マロ
㉜ きょうりゅうの世界　ドイル
㉝ わがはいはねこである　夏目漱石
㉞ リヤ王ものがたり　シェークスピア
㉟ 名馬スモーキー　ジェームズ
㊱ 空とぶ戦闘艦　ベルヌ
㊲ 日向が丘の少女　ビョルンソン
㊳ ファーブル昆虫記　ファーブル
㊴ 美しいポリー　オルコット

㊵ 三国志ものがたり　羅貫中
㊶ ウィルヘルム・テル　シラー
㊷ 宇宙戦争　ウェルズ
㊸ にんじん物語　ルナール
㊹ メアリ・ポピンズ　トラバース
㊺ ハックルベリーの冒険　トウェイン
㊻ 奇がん城　ルブラン
㊼ 野性のさけび　ジャック・ロンドン
㊽ いもうとマギー　エリオット
㊾ 三銃士ものがたり　デュマ
㊿ くろうま物語　シュウエル

勇気と感動をあたえる世界の偉人たちの努力と信念に
みちた一生を、やさしく編集した待望のシリーズ！

母と子の世界の伝記

★全30巻〈監修〉井上 靖/坂本太郎/浜田廣介

小学生むき　全30巻の内容

①ヘレン・ケラー
②野口英世
③リンカーン
④福沢諭吉
⑤エジソン
⑥豊臣秀吉
⑦キュリー夫人
⑧良寛さま
⑨ナイチンゲール
⑩宮沢賢治
⑪キリスト
⑫ファーブル
⑬徳川家康
⑭シートン
⑮キャプテン・クック
⑯シュバイツァー
⑰源義経
⑱アンデルセン
⑲湯川秀樹
⑳ノーベル
㉑一休さん
㉒リンドバーグ
㉓夏目漱石
㉔ナポレオン
㉕勝海舟
㉖ディズニー
㉗聖徳太子
㉘ベートーベン
㉙おしゃかさま
㉚ケネディ

集英社